

第二章 岐阜まつりの歴史

第一節 岐阜町から岐阜市へ

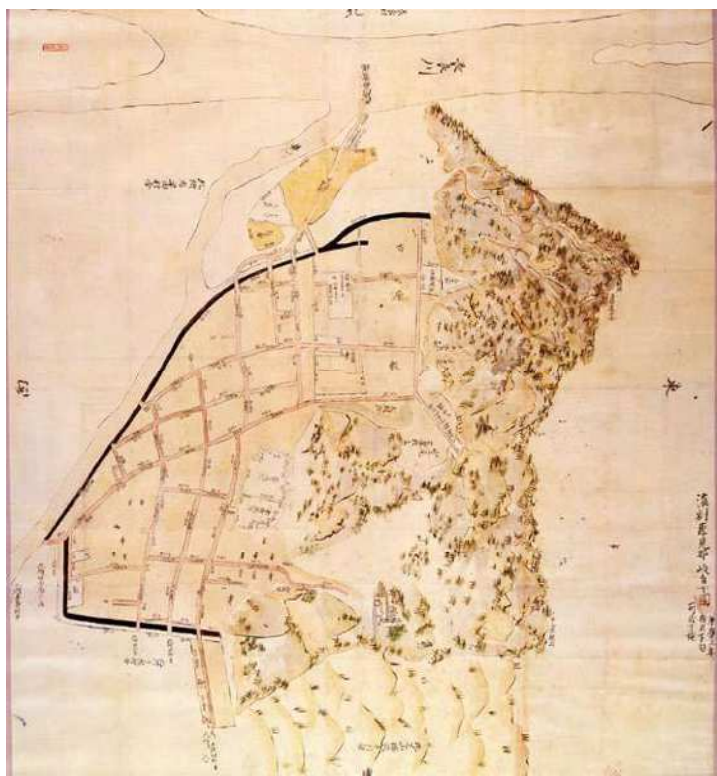
明治二十二年（一八八九）七月一日、岐阜市が発足した。その中核となったのは、戦国時代の城下町から近世の商工業・水運の町へと発展した岐阜町である。

岐阜町の東にそびえる金華山（稲葉山）上には鎌倉時代に城が築かれたと伝えるが、詳細は不明である。十六世紀初め、美濃守護土岐氏は拠点となる守護所を厚見郡革手から長良川対岸の福光・枝広へ移し、さらに大桑城（山県市）を築いた。この時期、井口（のちの岐阜町）周辺は有力家臣である長井氏の勢力範囲であったと考えられる。天文四年（一五三五）に起こった長良川の大洪水で枝広・井口の間で二万余の死者が出たと伝え『巖助往年記』、この時期には井口もかなりの集落だったのであろう。長良川は厚見郡と方県郡との境界を流れていた（古川）が、おそらくこの洪水の影響で、小河川であった井川（現在の長良川）の流れが大きくなり、その分岐点に位置する井口の水運上の重要性も増したと考えられる。

土岐氏を逐って美濃を掌握した斎藤道三は稲葉山城を拠点に、神社の移転や新たな町並の造成など、井口に城下町を整備した。道三の孫である龍興に代わって美濃を支配した織田信長は金華山麓に壮大な居館や庭園などを造り、岐阜の町屋の整備をさらに進め、伊奈波神社周辺に寺院を移転させた。城主は信長の子である信忠に代わり、信忠が父とともに本能寺の変で死去したのち城主は変転する。慶長五年（一六〇〇）に信長の孫である岐阜城主織田秀信は西軍に与し、関ヶ原合戦の前哨戦で敗れた。

合戦後に岐阜城は廃され、慶長六年に徳川家康の娘婿である奥平信昌が初代

加納藩主となり、廃城となった岐阜城の資材も活用して、岐阜町から約4km南の厚見郡加納に城が築かれた。一方、家康から美濃国奉行に任じられた大久保長安は新たに稲屋町裏に家康の滞在のための御殿を建て、その南に隣接して陣屋を設けた。政治・軍事・経済・水運の要地を幕府が直接掌握しようとしたのである。しかし元和五年（一六一九）、岐阜町は初代尾張藩主である徳川義直（家康の九男）へ与えられて尾張藩領の辺縁地域となり、ここで商工業・水運の町へと性格を変える。長安の陣屋の場所には、新たに尾張藩主のための御殿が造られた。承応三年（一六五四）に作られた絵図（資料2-1）は、道三・信長たちが造った十六世紀の城下町のようなすをとどめていると考えられる。東に金華山がそびえ、



資料 2-1 濃州厚見郡岐阜図（名古屋市蓬左文庫所蔵）



北部に長良川が流れて、川沿いと西端・南端には堤が築かれ、全体が総構えで囲まれる町であった。町の一部は総構え内から主要街道沿いに南部の堤を超えて伸びている。このうち、城下町時代に武家屋敷であった地区（総構え東部の古屋敷新田と、総構え内の周縁部に散在する明屋敷村）と北の川沿いに位置する中河原新田は江戸時代には村方とされ、中河原新田には長良川の水運を管理して役銀を徴収する川役所が置かれていた。元禄八年（一六九五）に岐阜町を統治する専任の岐阜奉行が新設され、藩主用の御殿の場所に岐阜奉行所ができる。それまで岐阜町は町内各町のゆるやかな連合体であったが、岐阜奉行創設とともに町政システムが作られ、近世的な岐阜町が成立した。

岐阜町の西にある忠節村、南の今泉村・小熊村は、町の区域ではないが家並みが続いており、岐阜町と同じときに尾張藩領となっている。

明治七年（一八七四）に今泉村に岐阜県庁舎が新築され、岐阜町周辺は県政の中核地となった。明治八年に古屋敷新田・中河原新田が合併して富茂登村、忠節村と明屋敷村が合併して稲束村が成立する。米原・大垣と東進してきた鉄道は明治二十年一月に加納まで達し、同年四月には加納・名古屋間も開通した。加納駅（現在の岐阜市元町に所在）は翌年に西に移動し、岐阜駅と名を変える（大正二年＝一九一三に現在地へ移転）。明治二十一年には上加納村（岐阜町と加納町の中間に当たる）に遊郭（金津廓）が開業する。明治二十二年に発足した岐阜市は、岐阜町と富茂登・稲束・小熊・今泉の各村と、上加納村の一部を合わせたものであった。市役所は初め今泉西野町、明治二十四年の濃尾地震でこれが倒壊したのちの同二十七年には白木町に置かれた。道路網も県庁などの官庁、金津廓、岐阜駅を中心として整備されていく。このうち明治三十六年に上加納村、昭和六年（一九三一）から同十五年の間に本荘・日野・長良・加納など十二か村戦後の昭和三十八年までに鏡島・方県・厚見など十六か村、さらに平成十八年（二〇〇六）に柳津町が合併して、現在の岐阜市となっている。

第二節 伊奈波神社の歴史

伊奈波神社の名の文字は、古くは因幡を主として伊奈波も使われている。正式に因幡から伊奈波へと改めたのは明治五年八月のことであるが、ここでは古い時代も含めて「伊奈波神社」と記載する。

（一）伊奈波神社の縁起

伊奈波神社には、その祭神・由来を書いた縁起が伝わっている。それによると、垂仁天皇（古事記・日本書紀で十一代天皇）が皇后のヒバスヒメノミコト（日葉酢媛命）との間に生まれた二人の皇子に望みを尋ねたところ、兄のイニシキイリヒコノミコト（五十瓊敷入彦命）は弓矢を、弟のオオタラシヒコノミコト（大足彦尊）は皇位を望んだ。天皇はその希望を叶え、兄皇子に弓矢を賜り、弟皇子は垂仁天皇が亡くなった後に即位して景行天皇となる。景行天皇はイニシキイリヒコノミコトを大変重んじたが、兄弟の仲を裂こうとした陰謀により、ミコトは因幡守として赴任させられる。一方、都では天皇家の宝剣が毎夜姿を消すという大事件が起こり、占ったところ宝剣が奥州の金石に心を寄せたためと分かった。そこで金石を都に召し寄せることになり、イニシキイリヒコノミコトが命じられて因幡国の兵とともに奥州に向かい、高さ約1・1m、周囲約2・4mの丸石（金石）を無事手に入れた。ところがそれを都に運び帰る途中で、ミコトの成功をねたんだ者の陰謀により、景行天皇がミコトを討つために大軍を派遣した。両者が対戦したのが美濃国厚見郡（現在の岐阜市南部）で、戦闘の間、金石は椿原に安置されていたが、一夜で高さ約110mの山となり、ミコトとその王子たちはそこに姿を隠した。ミコトは因幡大菩薩となって「金山」で衆生に利益を施され、奸計を信じて兄を討伐してしまったことを知った景行天皇は椿原の麓に社壇を造らせ、ミコトと王子たち、母後のヒバスヒメノミコ

トを祀らせた。

古い縁起が紛失したため、延文四年（一二五九）に卜部兼前が調進して神社に納めた。それが「漫滅」したので、文明四年（一四七二）に守護代の斎藤妙椿が世尊寺行高に書写させて奉納したのがこの縁起で、原本は天正十一年（一五八三）に岐阜城主織田信孝が羽柴秀吉らと戦った戦乱で焼失し、現在残るのは写本である（岐阜県重要文化財）。文明五年に美濃を訪れた公卿の一条兼良は、その紀行文『藤河の記』に「此山（※因幡山）は奥州より金の化来せるよし、因幡社の縁起にあるとかや」と記しており、この時点で伊奈波神社の縁起があったことは確実といえる。現在の伊奈波神社の主神はイニシキイリヒコノミコトで、金神社（岐阜市金町）はミコトの後であるヌノシヒメノミコト（淳熈斗姫命）、檀森神社（同若宮町）は二人の間に生まれた王子イチハヤオノミコト（市隼雄命）を祭神とする。また県神社（同県町）はイニシキイリヒコノミコトと毛里倫満娘との間に生まれたタラチネノミコト（擁烈根命）が祭神である。なお、「伊奈婆大神」の名は九世紀初頭に成立した『日本霊異記』の「女人産生石、以之為神而斎縁」に美濃国厚見郡の神としてすでに登場している。祭神の神階は、承和十二年（八四五）の従五位下から次第に昇り、正一位となった。前述の縁起には「美濃国第三宮」と書かれ、美濃国内でも社格の高い神社であった。近代には明治六年（一八七三）正月に県社、昭和十四年（一九三九）十一月に国幣小社に列している（昭和二十一年に社格制度は廃止された）。

縁起にある「椿原」は金華山の麓にある丸山のことと考えられている。この周辺の発掘調査で、七世紀には古墳、平安時代には古墳の石室を利用した祭祀関連かと思われる施設、十四世紀には「大寺」墨書遺物・五輪塔・石積など、十五世紀には梵鐘鑄造遺構が発見されており、ここに宗教施設があったと見てよいであろう。金華山北の「御手洗の池」は神社に参拝する者が身を清めた場であると伝えられている。

（二）神社の遷座

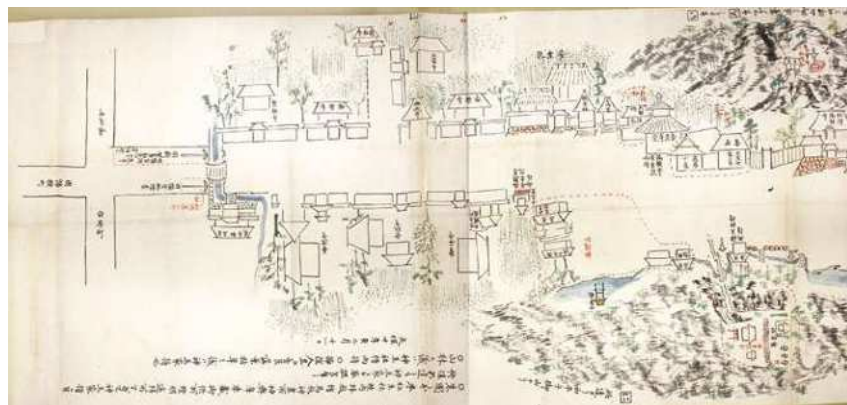
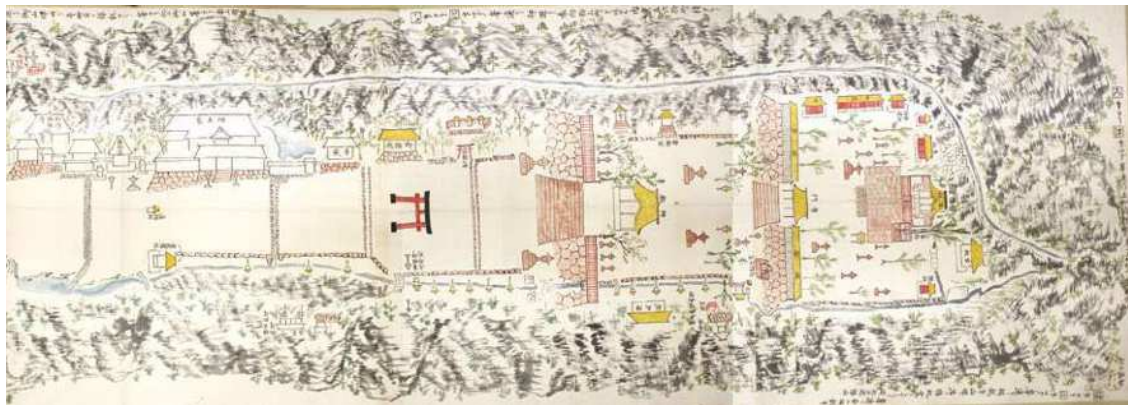
丸山から現地へ神社が移った時期については、『濃陽志略』（宝暦六年＝一七五六成立）などの江戸時代の地誌類では、斎藤利長が稲葉山の古城を再修した応永年中（一三九四～一四二八）とする。一方、慶長十八年（一六一三）の年紀がある「濃州厚見郡因幡大菩薩社之御事」『伊奈波神社略誌』掲載）では斎藤道三が天文八年（一五三九）に現地に移したと記載する。この文書の原本は確認できないが、延宝三年（一六七五）に書かれた「中島両以記文」『岐阜市史 史料編 近世一』所収）に、道三が因幡山を在城にするため神社を現地に移したと記述されている。応永年中・天文八年のいずれも神社の移転について同時代の史料は残されていないが、後者が傍証もあり信憑性が高いと考えられ、ここでは天文八年説を採用する。

所在地である丸山には、その後は長く烏帽子岩があるだけであった。烏帽子岩は、長良川のほとりに住む男性が物狂いのようになって鏡岩の下に沈む大石を引き揚げ神前に供えよとしきりに言っただけに従って、水底から引き揚げて伊奈波神社に運んだものと伝えられている（現在の神社境内、神門に向かって左手にある烏帽子岩は丸山の烏帽子岩を模したものという）。十九世紀中ごろに社殿が再建されたと伝え、江戸時代末には丸山山頂に建物が確認できる（小田切春江筆「岐阜町鳥観図」、伊奈波神社所蔵）。明治七年（一八七四）には伊奈波神社撰社「元伊奈波神社」となっており、現在も毎年四月二十五日に祠の前で丸山神社祭が斎行されている。

（三）氏子と境内建物の変遷

1 氏子の区域

室町時代以前には、美濃国厚見郡全体が氏子域であったらしい。これは、『日本霊異記』や、伊奈波神社縁起・『梅花無尽蔵』（後述）を根拠とする。



資料 2-2 天保 10 年 (1839) 伊奈波神社境内図 (伊奈波神社所蔵)



資料 2-3 安政 4 年 (1857) 伊奈波神社々景図 (伊奈波神社所蔵)

しかし江戸時代になると、金神社などが加納藩領に含まれることになり、氏子域も縮小した。十九世紀前期に書かれた『美濃雜事紀』に「産子四十五町に六ヶ村あり」と書かれているのは、岐阜町（四十五か町）と、岐阜町周辺の古屋敷・明屋敷・中河原・忠節・今泉・小熊の六か村を指す。

2 境内社殿

天文八年に斎藤道三が神社を移転したときには社殿が整備されたであろうが、詳しいことは分からない。天正十一年の戦乱で社殿も焼失したと考えられるが、再興されたであろう。延宝八年（一六八〇）には宮殿の廻廊・門・拝殿を再び造営した。天和二年（一六八二）の覚書（伊奈波神社所蔵）には、三間四面（約5・5m四方）の本殿、五間×三間の拝殿を初め、末社二十一社・鐘楼堂・神宮寺の満（万）願寺・薬師堂などの建物があつたことが記されている。鐘楼堂は、正保二年（一六四五）に小熊村が寄進したものであつた。貞享二年（一六八五）には破損が進んだ社殿の新築がなされ、尾張藩主徳川光友により遷宮の儀がおこなわれた。このときの棟札（伊奈波神社所蔵）には「郡郷氏子等以所寄之造営料新建立」とあり、氏子の尽力が大きい。正徳元年（一七一）九月に拝殿が焼失したが、享保十六年（一七三二）に復旧した『鸚鵡籠中記』『岐阜志略』。安政四年（一八五七）冬には、参道両側に石灯籠がずらりと寄進された。このきっかけは不明だが、『伊奈波神社略誌』では国難克服を願つてのものとする。あるいは、安政元年の地震で社殿も一部破損し、その復旧を記念してのものかもしれない。十九世紀中ごろの境内のようすは、37ページの二つの絵図により知ることができる。天保十年（一八三九）の資料2-2では、参道に木製と思われる灯籠が並ぶ。また、このころすでに伊奈波神社境内は花の名所でもあり、安政四年の資料2-3でも参道両側に桜が立ち並びピンクの花を咲かせている。

明治維新後の神仏分離により満願寺・仏堂・鐘楼堂などは姿を消した。さらに、明治二十四年（一八九二）の濃尾震災で神輿庫など以外は全て焼失してし

まう。社殿が面目を一新して復興されたのは明治三十年のことであつた。同三十五年には参道入口に石の大鳥居が寄進され、同四十一年ころには愛宕山に日露戦争の忠魂碑が建てられた。参道は同四十三年に敷石施工され、昭和十三年（一九三八）に舗装される。矢島町通りから神社へ続く東西の道は大正元年（一九一二）に幅八間（約15m）に拡張されて桜が植樹された。さらに、震災復興工事に続く拝殿などの新築工事は昭和八年に竣工した。

3 因幡芝居のにぎわい

江戸時代から明治時代にかけての伊奈波神社周辺は、岐阜町最大の娯楽の場でもあつた。その始まりは、満願寺境内で手芝居・見せ物の興行が尾張藩から許可された延宝四年（一六七六）のことである。享保二十一年（一七三六）には大門に板葺きの水茶屋が建ち、見せ物の興行も許可された。資料2-2では特徴のある屋根の善光寺の隣に「芝居小屋」とその隣・向かいに茶店が、資料2-3にも檜皮葺きらしい大きな建物（芝居小屋）を確かめることができる。この芝居小屋は文化二年（一八〇五）出版の『木曾路名所図会』には描かれておらず、このちに建てられたのであろう。ここには三代目中村歌右衛門など有名な役者が出演した。天保十三年（一八四二）に幕府の改革令に触れて江戸十里四方追放となった七代目市川団十郎（海老蔵）が、嘉永三年（一八五〇）に赦免の知らせを受けたのは、この芝居小屋に出演していたときであつた。

満願寺境内の芝居小屋は、明治初期の神仏分離にもなつて姿を消したのではないかと思われる。それに替わつて明治十年（一八七七）前後には、かつて岐阜奉行所があつた場所（伊奈波神社の北）に末広座、伊奈波善光寺前に国豊座、神社参道入口南に相生座、その西に栄座など劇場や寄席が次々と建ち、料理屋も多く、伊奈波神社周辺は新たなにぎわいを見せるようになる。これらの建物では歌舞伎だけでなく軽業・手品・講談・落語・演説会などが催され、伊奈波広小路の仮小屋でもさまざまな見せ物が興行された。国豊座などはいずれ



も明治二十四年の濃尾震災で焼失したが、震災後も芸妓屋・待合・料理屋が愛宕山の裏あたりから伊奈波山の上まででき、国豊座（のち明治座）・末広座は再建、米屋町の南東角に伊奈波座も建てられて再び活気づく。しかし、明治四十一年ころ愛宕山に忠魂碑が建設されるのにもない、麓の芸妓屋・待合が取り払われた。大正から昭和にかけて繁華街のにぎわいが柳ヶ瀬付近へと南下するとともに、伊奈波神社周辺の芝居小屋も姿を消した。大正六年（一九一七）には、忠魂碑前の広場を模範的公園（伊奈波公園）にする計画が立てられている。

第三節 伊奈波神社の祭り ―濃尾震災まで―

（一）中世以前

前述の延文四年（一二三五）の縁起には、「三月三日より六日まで、厚見郡平田東西庄以下の郷が八頭を勤めて八講を開き、奉幣する」と書かれているが、詳しいことは分からない。室町時代の学僧である万里集九が残した詩文集『梅花無尽蔵』には「濃州第三宮因幡大菩薩、祭礼再興之題辞」という文がある。そこには、伊奈波神社の祭礼は厚見郡全体として祭儀をおこなっていたのに、近年衰えてわずかに加納・井口の両郷住民だけとなったのを神が夢のお告げで嘆かれたので、神職が守護代役所に伝え、厚見郡の富裕な者の力で昔どおり盛んにすると述べられている。日付は明応五年（一四九六）三月三日で、これは祭礼当日だったと考えられる。祭儀の内容は不明だが、因幡大菩薩（伊奈波神社の祭神）が厚見郡全体で祀られていたのを知ることができる。

明治初期と思われる「美濃国第一大区 厚見・各務両郡由縁神社明細調」（岐阜県歴史資料館所蔵）の金神社の項目に「昔伊奈波神社ノ例祭ニハ其神輿上加納村金神社へ神幸ノ式アリシト云、今此式絶タリ、是ハ両神御夫婦ノ御神ナレハ、

カクアルヘキ御事ナルヘシ」と書かれている。この時点で「昔は伊奈波神社から金神社へ神輿を渡す神幸式があったそうだ」とかなり以前のことと記されており、江戸時代よりも前、おそらく中世以前の話として語り伝えられていたのであろう。同時代の史料では全く確認できないが、厚見郡全体で祀る神社であった時期には伊奈波神社から金神社へ神幸式がおこなわれていた可能性はある。祭日については、延享四年（一七四七）成立の『岐阜志略』および尾張真清田神社の祠官である佐分清円（一七六五年没）があらわした『美濃国古蹟考』の物部神社（伊奈波神社）の項目に、かつては三月朔日（一日）から六日であったと書かれている。いずれも後世の編纂物であり、根拠となる史料は見つからない。

しかし、中世の祭儀は伊奈波神社の社領が無くなった文禄年中（一五九二―一五九六）には廃れてしまったという。社領は『岐阜志略』に、かつては七百貫、道三から信長の時代には三百貫あったが、証文が天正十一年の戦乱で失われて豊臣秀吉の検地のときに社領は無くなったとする。

（二）江戸時代

しかし、慶長年中（一五九六―一六一五）には祭礼は復興したと伝える。『岐阜志略』には「慶長年中岐阜町中より車二十四輛渡ししとなり」、「美濃国古蹟考」にも「慶長年中三月三日、阜下民挙出餉車二十輛、儀祭礼」と、慶長期の祭礼復興を記す。ここでは山車を曳き出しているが、その数は両者で異なり、同時代の史料も残されていない。ただ、伊奈波神社には慶長二十年の年紀がある獅子頭（岐阜県重要文化財）が残されている。これは岐阜町の大工や杣らが造ったもので、かなり後ではあるが文久三年（一八六三）に岐阜町商人連中から獅子頭の屋台が寄進されている（ただし、江戸時代の祭礼で獅子屋台が出された記録は確認できない）。この獅子頭は、慶長年中の祭礼復興をわずかではあるが裏付けるものと考えられる。この時期の祭儀はまったく分からないが、前述の

慶長十八年「濃州厚見郡因幡大菩薩社之御事」では「三月三日於社頭神拝、次二本地之秘軌一座相勤申候」とあり、因幡大菩薩の本地仏である薬師如来にささげる儀式をおこなったのであろう。

このち、『岐阜志略』は「亦略して今三月三日に社頭にて軽き車二輛しぼらく飾り祭礼とす」、『美濃国古蹟考』は「事亦過奢美、鬭争之事アリ、町家制ノ止ム也、元禄十三年（一七〇〇）以来渡車二輛、到于今爾」と、盛んになった祭礼は十八世紀中ごろには山車二台のみになっている。『美濃国古蹟考』にいう山車をめぐる「鬭争」というのは確認できないが、岐阜町の各町が自分たちの山車の豪華さを競い合つて争うほどの状況だったのだろう。

享保十年（一七二五）に釜石町（現在の本町三丁目）に住む有力商人の柴田与市は、三月三日の祭りのようすを「祭礼首尾よく渡ル。天氣好。上大桑町・東材木町右両町也。上大桑町白髭、東材木町邯鄲。白髭からくり町嚙（※丁寧）也。邯鄲前代未聞のからくり、結構至極事共也。尤仕損シ候へとも、結構至極の事共故、諸人ゆるす。毎年の事ながら、余り替りたる事故、留置ク」と日記に記録している。からくり山車二台が出され、上大桑町は白髭、東材木町は邯鄲のからくりであった。これが、伊奈波神社例祭に曳き出すからくり山車の演目に分かる最初である。「毎年の事」と書いているので、このとき初めて山車が渡ったわけではない。あるいは、『岐阜志略』などという山車二台というのは、他にもある山車のうち当番で出された数をさすのかもしれない。後掲の表2-1では幕末に上大桑町は胡蝶のからくり山車、東材木町は踊り山車であり、いずれも変更があつたかと考えられる。なお、伊奈波神社の祭礼には岐阜奉行所の役人が見物するための棧敷も造られたことが柴田の日記に記されている。

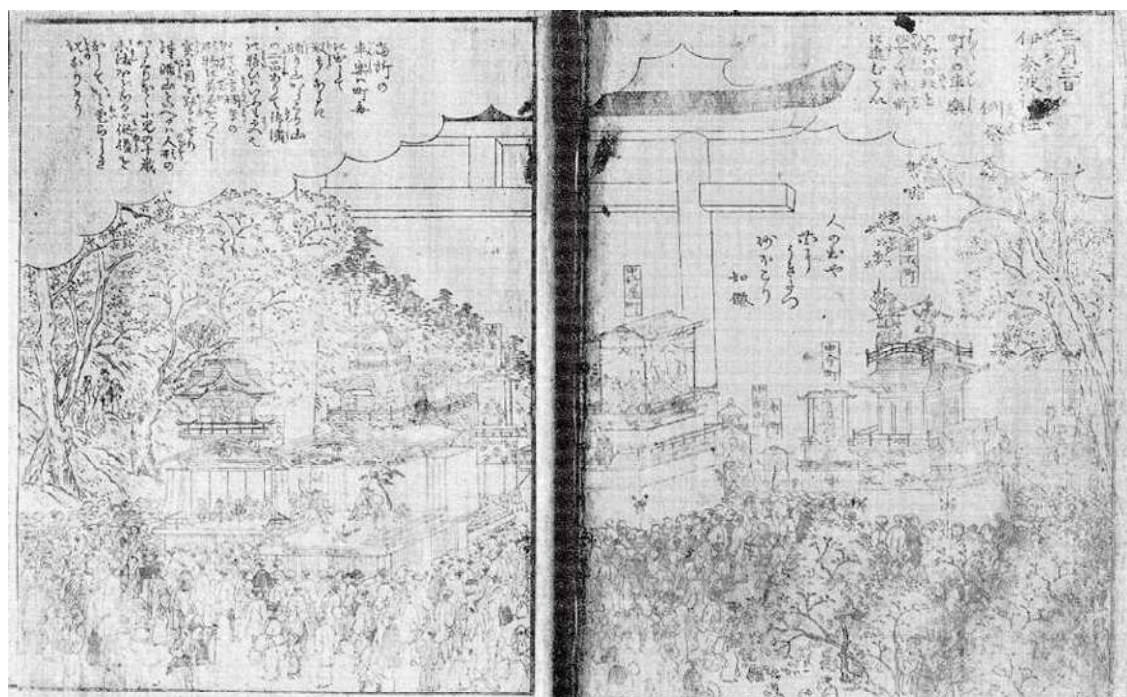
文化十年（一八一三）三月には、岐阜町の下笹土居町に新しいからくり山車ができた。川出家文書の『歳鑑』に「一、新山出来 笹土居えは山井からくり 謡囃子方迄不残引請（中略）此時ギフ下笹土居町御祭礼請取」と記録がある。

川出家は、長良川の岐阜町対岸に当たる真福寺村の豪商であつた。山車の代金は十七両で、川出家は謡方・囃子方まですべて請け負つた。

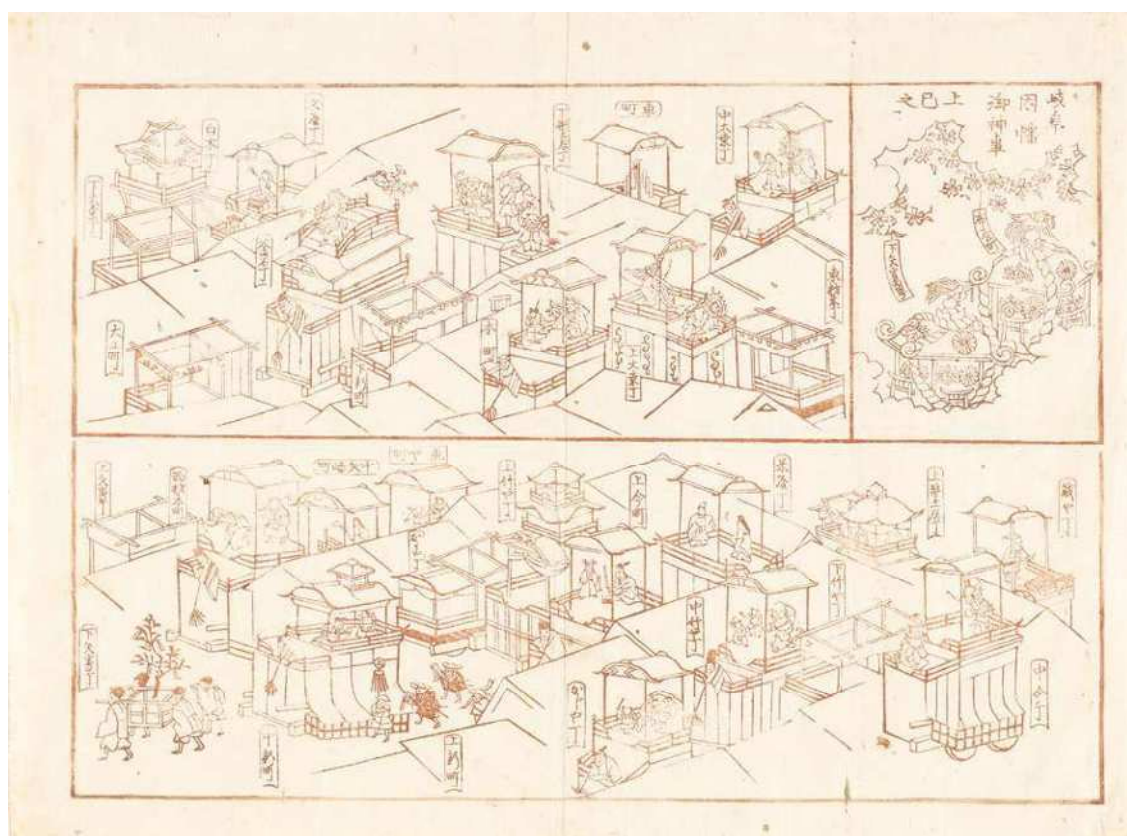
また『美濃雜事紀』には、「例祭三月四日、狂言あり」と書いた欄外に「岐阜奉行の思召にて狂言を止め、文政十丁亥年（一八二七）より山車に成る」と書き込まれている。山車はこれ以前から曳き出されているので、文政十年に初めて山車に変更したわけではない。後述する『手前味噌』や近代の新聞記事から見るかぎり、踊り山車の上では歌舞伎狂言が演じられており、岐阜奉行がこれを禁じたということであろう。

布屋町は神輿を所有しており、その道具箱には享保二十一年（一七三六）の墨書があつた『金華史誌』。木造横町（木造町）の獅子頭には宝暦五年（一七五五）の箱書、本神輿の鳳凰などには安永三年（一七七四）の箱書がある。箱の墨書からは、木造町の獅子神輿・本神輿・花神輿はこのち現代にいたるまで修復などが重ねられてきたことが分かる（詳細は第六章）。もとは中矢島町（加茂町。現在の矢島町一丁目中組）の山車で現在は関まつりで曳かれる加茂山車は天保十二年（一八四二）制作といい、現在も岐阜まつりで奉曳される安宅車の車は幕末から明治初期の制作と考えられる。このように、江戸時代後半には山車が新たに造られ、町神輿もかつていた。

本居大平（本居宣長の養子。一七五六～一八三三）は、「三月三日御祭を見奉りて」という長歌を詠んでいる（伊奈波神社所蔵）。「春風の 伊奈波の里の ゆきとほる 大路はろはろ 畏きや 神の御幸と うるハしく ねりゆく見れと 里人も こと里人も 遠近ゆ 袖引つらね 玉鉾の 道のちまたに 佐受岐（※棧敷） ゆひ さはにつとひて 大路のや 左みきりに 家毎に うすくまりをり 物見ると なみある見れは（後略）」と詠まれている。路傍で多くの人がうずくまつて拝するという姿勢は、山車に対するのではなく神輿、つまり神幸式がおこなわれていたことを示す。どのようなルートであつたかは不明だ



資料 2-4 伊奈波神社例祭（『伊奈波神社略誌』掲載）



資料 2-5 岐阜因幡御神事（岐阜市歴史博物館所蔵）

が、御旅所はあるいは伝承が残る下大桑町上ヶ門付近（現在の岐阜小学校あたりか）だったかもしれない『岐阜市史』。

また、前述した七代目市川団十郎と一緒に伊奈波の芝居小屋に出演した三代目中村仲蔵の自伝『手前味噌』には、祭礼のようすが記されている。嘉永三年（一八五〇）のことで、「三月三日、権現様の祭礼は中々立派なものにて、三十六町の内より隔年に十八ヶ町づゝ家台を出す例なりとぞ。この家台の上にて町々の童男童女十二歳より以下の者狂言を催ほすが毎年極りなり。これも種々例あつて、一切、切る事と殺す事を忌ゆゑ、狂言は一の谷陣屋、近江源氏の陣屋、廿四孝の竹の子と極め、われらこの子供等に稽古してやる。二日の宵宮賑はしく滞ほりなく祭礼済み（後略）」というもので、ここには踊り山車上で子どもたちが歌舞伎を演じること、岐阜町全体の半分ずつが隔年で山車を出すこと、三月三日が祭礼で二日に宵宮が催されたことが分かる。

また、江戸時代後半から明治時代末にかけて、若者たちが唄や踊りをしながら喜捨を集めるときに歌われた台本「柳津の七墓」（岐阜市歴史博物館所蔵）のうち、江戸時代末と思われる「岐阜御祭礼」には「帰命長来を好なれバ やりま正 是よりきたの金花山 ふもとに名高キ岐阜町の 祭礼あら／＼申そなら三十六町みなそろへ 三月三日の晴天に おいなば様え山を引く ミな壺式ばんのばんをつけ ○祭礼や山のばんづけハ拾六文と通りぬる（後略）」と唄われている。

江戸時代の祭礼は、『岐阜志略』では三月三日、『美濃雜事紀』では三月四日と書かれているが、少なくとも幕末には『手前味噌』から二日が宵宮、三日が本祭であった。また本居大平の長歌から、神幸式も三日に斎行されたものと考えられる。

このころの祭礼のにぎわしさを描いた絵画が二点残されている。一点は尾張藩士の小田切春江（一八一〇～一八八八）が描いた「岐阜名所図会」の中の一

枚で、写真が『伊奈波神社略誌』に掲載されている（資料214）。そこには、三月三日に各町から出された山車が神社前の坂を登るのを見物する群集が描かれる。人物には洋装は全くなく男性は全員まげを結っているのが、江戸時代末期のものである。添えられた文章には「三月三日 伊奈波神社例祭 町々の車楽いなバの坂を登りて神前に進むてい」と題して「当町の車楽ハ町毎に出して数多あるに、踊り山・からくり山の二品ありて、錦繡の粧ひハいふも更也、うてな・高欄等の彫物に善美をつくし、実に目を驚かせり。殊ニ踊山といへるハ、人形のからくりなく、小児の十歳未満ほどなるが俳優をなして、いと愛らしき観なりけり」と書き、上竹屋町・釜石町・中今町などの山車が神社鳥居前でからくりや歌舞伎を奉納している。

もう一点は「岐阜因幡御神事」（資料215）と題する木版印刷物（岐阜市歴史博物館所蔵）で、二十七台の踊り山車・からくり山車、鷹狩りの仮装行列、神輿、榊が家並みの間を進み、「上巳之日」つまり三月三日に催された山車の勢ぞろいのようなものである（明治六年に祭日は四月に変更）。このような刷り物が、「柳津の七墓」に唄われる「山のばんづけハ拾六文」の番付に該当するのである。これは観客はなく服装などで年代は確定できないが、販売するものであれば毎年増し刷りされたであろうから、特定の年代ではなく長く使われた可能性がある。『手前味噌』では岐阜町内の各町の半数ずつが交代で山車を出すとしているが、この「岐阜因幡御神事」はすべての山車・神輿などが描かれたオールスターキャストであり、どの年でも通用したであろう。ただし、十八世紀中期から十九世紀にかけて造られた木造横町の本神輿などが描かれていないが、この理由は分からない。

なお、「岐阜因幡御神事」に描かれた町はすべて岐阜町の内であり、氏子である周辺の中河原新田・小熊村などは含まれていない。中河原新田に住んで長良川役所の改役という役職を勤めた西川家の日記（岐阜県歴史資料館所蔵）に



も、祭礼を見物に行くのみで参加しているようすはない。また、祭礼の名称は「伊奈波神社例祭」「因幡御神事」とある以外に、「柳津の七墓」では「岐阜御祭礼」、西川家の日記に「岐阜祭礼」の名で記される。下佐波村（現岐阜市）の青木久兵衛が残した日記『岐阜大学教育学部郷土資料』では明治四年（一八七二）以後に家族が毎年のように岐阜町へ祭り見物に出かけているが、そこには「岐阜祭り」と書かれている。岐阜町の外からは、伊奈波神社の春の例祭が遅くとも幕末には「岐阜祭礼」「岐阜祭り」と呼ばれていたことが分かる。

（三）明治時代前半 ―濃尾震災まで―

版籍奉還、廃藩置県を経て、明治四年十一月に岐阜県が成立した。この翌五年三月の祭礼にあたり、二月に小熊村庄屋・岐阜町惣年寄から岐阜県庁へあてて、祭礼に山車・神輿・櫓飾りなどをおこなう届が提出された。『伊奈波神社略誌』にはその内容が掲載され、「山車数多二付、神前おめて両日二而執行」とあるが、『笠松県・岐阜県庶務掛日記』（岐阜市史 史料編 近代一）所収には「来月（※三月）二日・三日、躍車等為牽申度願出」とあり、祭礼は二日宵宮、三日本祭であったと思われる。この届は村方・町方だけの作成で伊奈波神社は作成者に含まれておらず、山車などが町・村の主催であったことを示している。また、小熊村が含まれているのは、明治四年三月三日に「岐阜祭礼 但当年ヨリ鉄屋・小熊一緒ニナル」と『上加納村旧記』（岐阜市史 史料編 近代二）所収）にあるのに対応するもので、小熊村が伊奈波神社の祭礼に直接関与するようになったためであろう。

ここには、からくり山車十一、踊り山車十三、神輿三、神前への供え物六、櫓飾り一の合計三十四か町が挙げられている。おそらく、岐阜県成立という大きなできごとに対する祝賀として、たくさんの方から奉芸や供え物がなされたのであろう。小熊町・中鉄屋町（いずれも小熊村）も踊り山車を出している。

また、現在も続く清影車の前身であるからくり山車が玉井町（中河原新田）で新造されたのは明治六年のことで、この時期に初めて祭礼に岐阜町区域以外から奉芸されるようになった。

祭日は太陽暦採用により明治六年から四月四日・五日に改められた。明治七年には上加納村の金神社・溝畑社・粕森（榎森）社・住吉社・県社の祭日を正月二十日から四月三日に改定するとの届が岐阜県へ出されており、『岐阜市史 史料編 近代一』掲載、さらに明治九年に金神社の祭日を四月三日から伊奈波神社と同じ四月五日に改めたいと願っている『上加納村旧記』が、すでに「美濃国厚見・各務郡神社明細帳」（岐阜県歴史資料館所蔵）では明治七年五月時点で金神社を初めとする上加納村の諸神社は例祭日を四月五日としている。また、今泉村西野の天満神社も明治初期に「近來四月五日を祭礼日に加えた」（岐阜県歴史資料館所蔵「美濃国第一大区 厚見・各務両郡由縁神社明細調」という。明治二十二年に岐阜市が発足し、のち周辺地域が岐阜市と合併していく中で例祭日を伊奈波神社と合わせていった例は多い。昭和十六年（一九四一）に岐阜まつりと同じ四月四日・五日に例祭を斎行した神社二十一社は、すべてこの時期に岐阜市内に所属している（岐阜日日新聞 同年三月三十一日記事）。現在、岐阜まつりの日に市内各地の神社で例祭がおこなわれるが、その動きはすでに明治七年に始まっているといえる。

このち、岐阜まつり（以下ではこの名称を用いる）のようすが具体的に明らかになるのは明治十九年以後である。十九年にはからくり山車九、踊り山車六、造り山車一、神輿一が出された。このときには「当番」が決まっており、『手前味噌』に記されたとおり山車などが全て曳き出されるのではなく、順番で出されたことが確認できる。また、山車の曳き出しについては当番町と各町総代らが伊奈波神社で集会して決めており、町民の合議に基づいて実施されていた。実はこの年は不景気で節約のため例祭延期の意見もあったが、各町はすでに準



資料 2-6 からくり人形の板絵（伊奈波神社所蔵）



備にかかつており、当番町・各町総代が執行と決めたものであった。

このとき、末広町（旧岐阜奉行所跡に明治八年に成立）では「新趣向」として車の上に八重桜を模した樹を立てて周囲に作り花を飾り、町内の若者が三弦・太鼓で囃しながら市中を回った。これが、のちにたびたび登場する「造り山車」であろう。こののちの記録には「造り（作り）物」という語が毎年のように出ており、また『岐阜市史 通史編 民俗』には「造り山車」に趣向を凝らすようすが記されている。「造り物」と「造り山車」の区別ははっきりしないが、造り物は同じ奉納物を「造り山車」と書いている場合もあり、車に載せて曳いたものらしい。なお、西川家の慶応三年（一八六七）の日記『岐阜県史 史料編 近世9』所収）には大八車二台で「踊り山・からくり山」をこしらえたという記事があり、丈高い山車でなくとも臨時に踊り山車などを作ることができた。

明治二十一年には岐阜まつりの「祭典掛」という役名が初めて確認できる。氏子総代や各町総代とは別に選ばれ、祭典のとりまとめや紛議のときの調停役を勤めた。この年にはからくり山車八・踊り山車四・造り物二・神輿五で、二か町が櫛を出した。新聞では、四月三日に各町の山車は岐阜県庁（このころは司町に所在）前に曳きつける予定と報道されている。これは明治十年に、四月三日は神武天皇祭日でもあることから「山車引初」を復活させたいと小熊村・岐阜町と神社から岐阜県へ願い出て許可されたもの（伊奈波神社所蔵『伊奈波神社史稿 祭儀篇』で、各山車は県庁前で囃を演じたうえで点燈し、あちこちを曳き回した。明治十九年には確認できないが、このうち三日の「引初」は断続的ながら続けられ、「三日の夜宮」とも呼ばれている。四日の宵宮では車之町（現在の本町五丁目）・七曲町（同六丁目）ですべての山車などが点燈して伊奈波神社へ向かった。六日には「山車卸し」として町民が岐阜公園などで行楽をしているが、これはおそらく江戸時代から続くものであろう。また、茶屋町（旧古屋敷新田）・忠節町（旧忠節村）・美園町（上加納村のうち。小熊村の南に位置し、

岐阜町と加納町をつなぐ街道上に江戸時代から町場を形成していた）から神輿が出されている。小熊村は明治四年以来まつりに参加し、玉井町（中河原新田）は同六年に山車を新造しているが、それらに続いて明治二十一年には岐阜まつりでの奉納区域が旧岐阜町外にさらに拡大している。

明治二十二年はからくり山車六、踊り山車三、造り物三、神輿二であった。また、俄・手踊りが市中を回り歩いた。

明治二十三年は陸海軍の大演習により兵士が各町に止宿するため、祭日が四月八・九日に変更され、奉納はからくり山車八、踊り山車三、造り物三、神輿二と、櫛が二か町、鏡餅が一か町であった。この年から、山車の当番をくじ引きで決めることとなる。また、二月の社務所における会議で「本年ハ上加納へ氏子総代之内より誘導^{かたがは}旁通知有之筈」と議決されており、岐阜まつりへの勧誘を上加納へおこなうとしている（伊奈波神社所蔵「例祭関係書類綴」）のは、前年七月に岐阜市制が施かれて旧上加納村の北部が岐阜市となったのに伴うものであろう。

明治二十四年はからくり山車六、踊り山車三、造り物二、神輿二と、櫛が二か町、鏡餅が一か町であった。この年の「例祭議決之書類留」（伊奈波神社所蔵）には、からくり山車・踊り山車と造り物・神輿・櫛・鏡餅を出す町のリストがある。からくり山車は十四（すでに無かった上大久和町を除く）、踊り山車は十一、造り物は十、神輿は三である（このうち明治二十四年に実際に奉納した町は表2-1では赤字で示してある）。からくりの内容も書かれており、この時期の各町の奉芸の全容を知ることができる。そのからくり人形のようなものは明治二十三年に奉納された板絵（資料2-6）に描かれている。筆者は牧田種麿（一九〇八年没）で、繊細で華麗な絵を得意とし、伊奈波神社のすぐそばに住んでいた。翌年の濃尾震災で山車も被害を受けたことを思うと、この絵は失われた山車のからくり人形の記録としても貴重なものである。

「例祭議決之書類留」には、祭礼の日程をまとめた「祭典定約」が含まれている。それによると、

◎三日 引初。からくり山車は正午までに県庁前に揃い演技。踊り山車・造り物は午後一時から適宜県庁前に引つけ、都合次第芸事をする。

◎四日 試楽。午後二時に神拝式。夜宮神事。からくり山車は番号通り列をなす。踊り山車・造り物などは最寄りの場所より、からくり山車の後に引き渡る。

◎五日 本楽。午前八時に神拝式。午前十時から、からくり山車が奉納。正午から造り物奉納。午後一時から踊り山車奉納。

という次第であった。ここには神社から神輿を出す神幸祭が記載されていない。四月四日の岐阜日日新聞記事には「同社の神輿は今明の両日市内を歩き廻るなり」と書かれているが、これは町の神輿であろう。

この時期の岐阜まつりに出された山車などは、本章末尾の表2-1にまとめている。ただし、上大久和町は明治十七年に所有していたからくり山車を売却し、三年の間に山車を新造する約束であったが果たせなかった。明治二十四年には、他の町から借りて出車している（「例祭関係書類綴」「例祭議決之書類留」）。資料2-16に同町のからくり人形が描かれていないのはこのためである。米屋町は所有するからくり山車が小さいため造り替える予定で明治十年ころに加納天神町へ売却し、新造からくり山車の図面まで引いたものの実現しなかった『岐阜米屋町史』が、資料2-16に「御湯花」のからくり人形が描かれており、この理由は今明らかにできていない。また明治二十三年に常盤町は踊り山車をからくり山車に変更したいと願っている（「例祭関係書類綴」）が、これは他町から借りるということであろう。

このころに各町で所有していた山車は、町内に保管場所があったと考えられるが、くわしいことは分からない。わずかに米屋町が現在の伊奈波通一丁目の町有地にある山車蔵（間口二間、奥行三間）にからくり山車と人形などを納め、

その東の借家を会所として奉芸の稽古や山車卸しの会場とした『岐阜米屋町史』こと、車之町の山車（からくり山車）蔵は木造町へ続く道とT字路になった部分にあったが、戦争中の強制疎開で取り壊されたこと『岐阜町金華の誇り』が分かる程度である。下新町では十九世紀に町所有の屋敷に祭礼道具を入れる小屋を建てていた（『下新町家並帳』、『岐阜市史 史料編 近世一』所収）が、あるいはここに踊り山車も納めていたのかもしれない。

なお、踊り山車の稽古は三月初旬から始まった。学校に通う児童たちは休業して励み、勉強がおろそかになると識者が心配するほどという。確認できるかぎりは踊り山車の上で演じられるのは歌舞伎の演目であった。また、踊り山車は稽古のため引初以前から町内路傍で上演したり隣町へ曳き出したりしている。

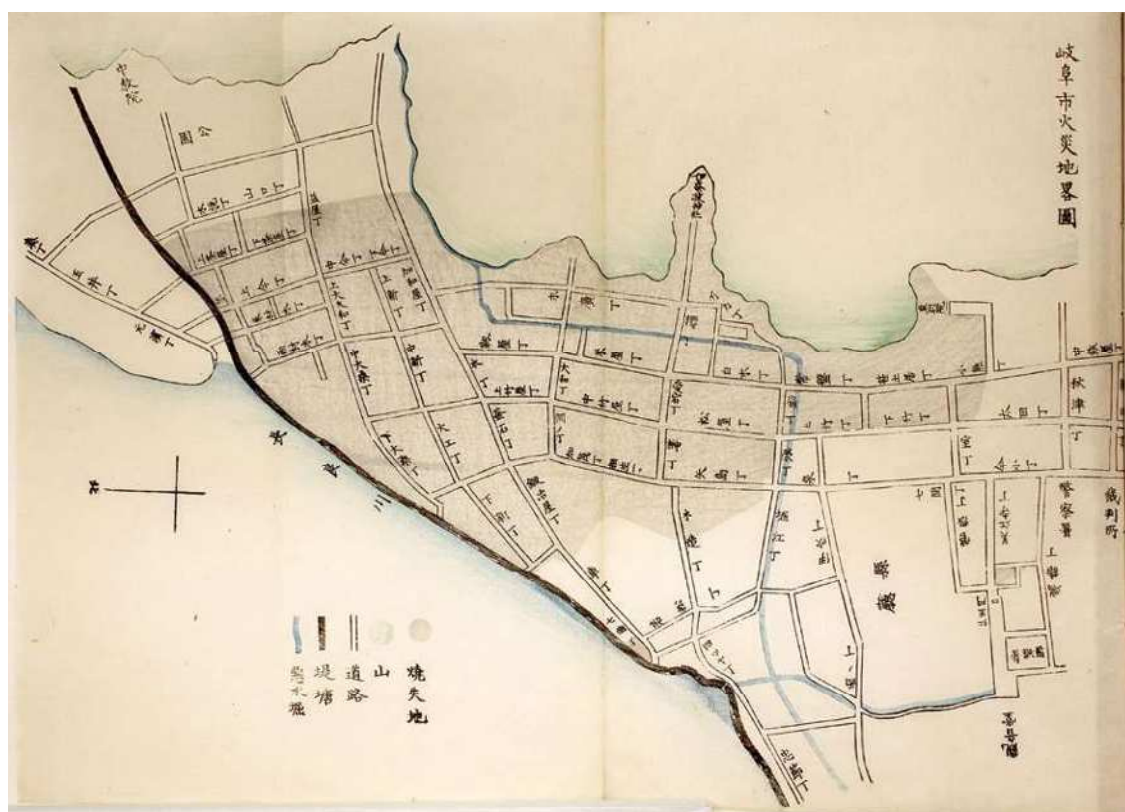
第四節 濃尾震災から終戦まで

（一）濃尾地震による被害

明治二十四年十月二十八日午前六時三十七分、マグニチュード八・〇を超える大地震が岐阜県を中心とした地域を襲った。測候所の地震計を破壊するほどの激震のちも余震が繰り返し、二十八日午後だけでも百回以上の震動が記録されている。そして、直後に起こった火災がさらに被害を大きくした。最初に出火したのは岐阜市秋津町にあった蚕糸組合事務所と伝えるが、すぐに木造町・下新町・七曲町・鍛冶屋町（現在の本町四丁目）にも火の手が上がる。家族や家を失って狼狽する市民は消火につとめる者も少なく、秋津町・七曲町・木造町はようやく消し留めたものの、他の二町の火は東北に向かって広がり、さらに強い西北風にあおりたてられた火勢は東南方向へと町を焼き尽くし、地震から九一日以上たった二十九日の午後二時になってようやく鎮火した。この大災



資料 2-7 伊奈波神社周辺の震災被害写真（岐阜市歴史博物館所蔵）



資料 2-8 岐阜県下震災景況の中の岐阜市火災地略図（岐阜市歴史博物館所蔵）

害は「濃尾震災」と呼ばれている。

このとき、かなりの人数が家財とともに伊奈波神社に避難していたが、西北風をともに受ける境内は、延焼を防ぐ手立てはない。伊奈波神社祠官であった塩谷幸満は御神体・神宝・古額・棟札などを運び出したが、伊奈波神社に近付いた火の手はまず近くの民家に及び、そこから「摂社愛宕神社ニ移り、其撰末社鳥居ヲ焼払フト見ル間ニ、本社・遥拝所・大鳥居ヨリ水琴亭・雲錦楼及ヒ我県家花ノ寮ニ燃移り、延テ塔ノ稻荷社及ヒ境内ニ堆積セル市民ノ家財ニマテ齊シク発火スルニ至レリ。是ヨリ前、本社・拝殿ハ既ニ飛火附着シテ北部屋根ヨリ火焰ヲ揚ケ、徑チニ神饌所・神廐・行事殿・宮門左右回廊・手水所及ヒ四近ノ立木ニ移り、終ニ本殿撰末社ヲ併セテ焼失スルニ至リシナリ」（塩谷幸満著『震災記』、伊奈波神社所蔵）。山上も山下も一面の火の海となり、午後三時ごろには宏壮な社殿はただ礎石を残し、鬱蒼と茂っていた老樹も枯れた幹を見せるだけとなったしまった。資料2-7は伊奈波神社参道付近の惨状の着色写真（岐阜市歴史博物館所蔵）で、山ぎわまで見通せるほど全てが失われた中に枯木が突っ立ち、瓦礫が散らばっている。石灯籠や石垣も崩れ落ち、境内の建物で焼け残ったのは神輿庫と社務所だけであった。

濃尾震災で、岐阜市では死傷者約一五〇〇名、総戸数の三分の一が全焼し、それを合せて三分の二が全半壊した。各町の山車もほとんど焼失し、残るのは車之町・加茂町のからくり山車と、上鉄屋・下鉄屋両町共有の踊り山車のみであった（岐阜日日新聞 明治二十七年三月二十日記事）。この「上鉄屋」は「中鉄屋」の誤記と思われるが、明治二十四年には中・下鉄屋町はそれぞれ踊り山車を所有とされている。震災を免れた一台が両町共有となったのであるうか。

伊奈波神社では二十九日に類焼を免れた社務所に御神体や宝物を遷し、十一月十四日には本社仮殿が造営されて仮遷座式が挙行された。翌明治二十五年から再建のための寄付を全国に募り、罹災した氏子たちも明治二十六年二月から

三年間の日掛けで積み立てを始めた。内務省や市内有志からの提供、上有知町（現美濃市）・揖斐町（現揖斐郡揖斐川町）など市外からの寄附も合わせた資金をもとに、明治三十年十一月二十一日に本社・幣殿などが竣工し、正遷宮をおこなうことができた。

（二）震災後から終戦時までの岐阜まつり

震災直後の明治二十五・二十六年にも四月の例祭は斎行された。二十六年には四屋町の若者たちなどの俄や興行がおこなわれ、「昨年に比べれば幾分か祭典の氣を増した」と報道されている（岐阜日日新聞 同年四月七日記事）。

このち、岐阜まつりはさまざまな新しい様相を見せる。まつりそのものは、皇室の慶弔や戦争、伊奈波神社の慶事、景氣の良しあしなどで盛り上がりにも強弱がある。ここでは、非常に盛んにおこなわれた明治二十七年・同三十九年だけを個別でとりあげ、それ以外は毎年のようすを詳述することはず、震災後にあらわれる新しい動向についてまとめる。

1 山車・神輿の新造・売却・奉納

震災により岐阜まつりの多くの山車は失われた。それ以後の奉納物は表2-1から3にまとめたが、もう少し詳しく述べる。

現在も奉曳される安宅車は、車之町（現在の本町五丁目）の山車であった。同町は「岐阜因幡御神事」では造り山車と見えるものを曳いているが、明治二十一年に大改修して弁慶義経のからくり山車に改装、「安宅車」と呼ばれるようになった。表2-1では明治十九年に車之町はからくり山車を曳いているが人形は分からず、これが現在の安宅車と同じだったか、あるいは他町から借りたものかは不明である。

同じく若戎車（蛭子車）は、加納本町三丁目の山車が金屋町に移ったものと伝える。加納天満宮（岐阜市加納天神町）の祭礼もからくり山車などが多数奉



納される非常に盛んなものであった。嘉永五年（一八五二）の天満宮九百五十年神忌の祭礼に本町三丁目が「蛭子山」を曳いており『加納藩士 田辺氏見聞録』、若戎車の人形の箱書に「三丁目」「三丁目」とあることも加納本町三丁目からの山車の移動を裏付けている。譲渡先と伝承される「金屋町」は表2-1・2の中鉄屋町・下鉄屋町を指すであろう。明治二十七年に両町と小熊町は連合して「下山車に造り物」と俄を出し、同三十二年には中鉄屋町が「旧踊り山車台」に紙雛の造り物を載せる造り山車を曳いている。これらは、震災で残された踊り山車を使用したであろう。明治三十四年には下鉄屋町がからくり山車、同三十九年には中鉄屋町が蛭子の鯛釣りのからくり山車を曳いている。この年の山車を描いた「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之図」の中鉄屋町の山車（資料2-9右上）を見る限りでは蛭子は成人であり、現在の若戎車と同じとは断定しにくい。同じ年に加納天満宮の祭礼では三丁目がからくり山車を出しており、同四十一年以後の加納の祭りには三丁目の山車が確認できないので、このころに加納から金屋町へ移ったと考えられるが、時期はまだ特定できていない。

清影車は、今回の調査で山車蔵から見つかった「玉井町」の札の裏書からその歴史が分かる。「明治六年九月玉井町先輩、一町独立山車ヲ新造シ伊奈波神社ノ祭儀ニ列ス。同二十四年十月大震災ニ罹リ全市殆ト焦土トナリ、山車亦焼失セリ。同三十六年十一月玉井町・元浜町・港町ノ三町協同、更ニ山車ヲ造ランコトヲ議シ、同三十七年一月起工、同三月竣功、自今三町当番挽之、永以為例。明治三十七年三月誌之」というものである。明治六年に中河原新田のうち玉井町が一町で造った山車（これも清影車の名であった）が震災で焼失し、明治三十七年に玉井・元浜・湊の三町で協同して新造されたものであった。

踊車は太鼓の収納箱に「小熊町」の墨書があった。小熊町は明治初期から踊り山車を曳いているが、新聞報道では焼け残った山車に含まれていない。こののち同町は造り物（おそらく造り山車）を出しており、若戎車が金屋町へ譲

られてのち、中・下鉄屋町共有の踊り山車が小熊町へ移った可能性が考えられる。以上の現存四台以外に、松屋町では明治三十九年に日露戦争の戦勝気分が盛り上がり山車を新造し、加納本町へ譲つていた唐子の人形を買い戻した。人形は司馬温公の甕割が題材であった『岐阜市史 通史編 民俗』。ただし、資料2-9で松屋町は蛭子の鯛釣りのからくり山車となっている。

また、明治三十二年に常盤町は「融のからくり山車」を曳き出し、同三十四年に上加納区内の金津青年会がやはり「融のからくり山車」を出している。この二つが同じものかどうかは不明で、常盤町がからくり山車を新造した記録は見つからない。

新造以外に、売却された例もある。加茂町のからくり山車は明治二十七年三月に武儀郡関町（現関市）へ売却された。震災でわずかに焼失を免れた山車が市外へ移るのを惜しむ人から取り戻しを求める動きもあったが、実現していない。

神輿については、明治二十七年に柳沢・藍川・東川端・鉄屋横町が連合して新造している。末広町も昭和初期ごろに新造してまつりでかついだ。戦前にも子ども神輿があり、昭和十二年の本楽に境内へ子どもたちがかついで繰り込んでいることが確認できる。一方では、矢島町が所有する神輿二基を明治三十四年八月に伊奈波神社へ奉納し、神庫に納められることになった。ただし、同町が祭礼で神輿を出すときには申し出に応じると約束されている（伊奈波神社所蔵 明治三十四年『日誌』）。布屋町も昭和十九年に神輿を神社に奉納した（『金華史誌』）。

表2-1から3で見られるように、山車は震災後にもかなりの町から出されている。しかし、それらは全て各町が所有していたのではなく、他町から借り出したものも多かったと考えられる。明治三十九年の岐阜まつりでは「竹ヶ鼻・加納町あたりから丈高いからくり山車を借りた」（岐阜日日新聞 同年四月四日記事）といい、同四十三年には加納町のからくり山車借用について祭典掛が打診している（伊奈波神社所蔵『例大祭雑誌』）。松屋町・車之町のからくり山車

は自町で曳く以外に、要望があれば他町へも貸し出した『岐阜市史 通史編 民俗』。大正八年に泉町は伊奈波神社から「奉芸車台」を借りており（伊奈波神社所蔵 大正八年『日誌』）、造り物を載せる車台だけを神社から借りることもあった。

表2-1から3は、以上のように借用山車などが含まれていることを意識してみる必要がある。

なお、昭和五年にはまつりのにぎわいを増すために伊奈波神社から山車二台を出したと報道されている（大阪朝日新聞岐阜版 同年四月二日記事）。戦前に山車自体を伊奈波神社に奉納した事例は全く見当たらず、この二台の山車の由来はまだ解明できていない。

2 明治二十七年の岐阜まつり

明治二十七年は、震災後最初の本格的なまつりとなった。新聞では「お祭りの中興」とまで表現されている。神社はまだ本格的な再建ができていないものの、四月三日に引初、四日試楽と宵宮、五日本楽がおこなわれた。

社務所では「にぎにぎしい祭典執行」を各町に依頼し、その準備状況を調べている。祭典掛も震災前と同じように選任された。奉納内容は表2-1にあげたが、震災前のからく山車・踊り山車は車之町以外全て姿を消している（米屋町もからく山車を出しているが、どのような山車か不明）。それに替わって、各町は造り物や俄を工夫して祭礼を盛り上げた。造り物は末広町の巨大な笙（しょう）、美江寺町の牡丹唐獅子などで、新聞には「鯛・太鼓・湯立て釜・神酒樽・天狗・桜・馬・神樂獅子・長刀鉾・鳥居に狐・神鏡・松に月狸・桜に瓢箪・石橋獅子・狸々・桜に鼓・浦島玉手箱・達磨・岩戸神樂そのほか」と書かれており（岐阜日日新聞 同年四月七日記事）、各町の熱気がうかがえよう。山車・造り物や俄を出した町は二十一か町、神輿も古くからある木造町を初め四基が練り出された。

この年の特徴は、旧古屋敷村・旧今泉村（いずれもこのときは岐阜市）から

多くの奉納がなされていることである。祭典掛は初めて上加納地区からも選任され、上加納地区も山車などを出すこととなった（新聞紙上では「上加納からも十数余の山車・造り物」とあるが、具体的には確認できない）。この年には、伊奈波神社へ奉納物を曳くときには上加納へも行き、金神社へ集まるときは岐阜区内も曳くことに伊奈波・金両神社の氏子が合意している。従来の山車などが旧岐阜町を中心とした区域を回っていたのに対して、この時点での「岐阜市」全体を練り歩くこととなったのである。奉納物が多く地域も広がったため、それまでは車之町に全体が揃って神社へ向かったのを、地域を南北に分けて北地域は車之町、南地域は裁判所前（旧岐阜市役所付近）に集まり、そこで点燈して神社へ向かうと変更された。これはのちにも継続され、神前に曳き込む順序の後先は南北で隔年であった。

また、まだ岐阜市には含まれていなかった、長良川対岸の長良区域からも神輿が練り込まれた。大正から昭和初期には鵜飼屋など多くの神輿が長良地区から伊奈波神社へ連合渡御したと伝える（「高見のみこし 長良のみこし」）が、明治中期にも練り込まれていた。

3 明治三十九年の岐阜まつり

明治三十九年は日露戦争の戦勝祝賀で四月一・二日に「凱旋祭」、四日試楽と宵宮、五日が本楽と、岐阜市は一日から五日まで非常ににぎわいを見せた。奉芸は日露戦争開戦の明治三十七年以後見合されていたので、この年は「平和の第一年」としようと、「四ヶ年分（※正しくは三ヶ年分）を一纏」めに奉芸する（岐阜日日新聞 同年三月十五日記事）ため非常に多数に上り、一日は二十五種、二日は三十種、三日は三十八種、四日・五日はそれぞれ三十九種の「祭典余興」がおこなわれた（岐阜日日新聞 同年四月七日記事）。岐阜まつりで出された山車のように、朝日堂が出版した「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之図」（護国之寺所蔵、資料2-19）からうかがうことができる（一覧は表2-1に掲載）。からく



俄は震災後は明治二十六年から繰り出された。造り物の山車について上演される以外に、単独で「流し俄」もおこなわれている。明治二十九年には俄のた

くなくなっていたのではないだろうか。

濃尾地震後に「余興」と呼ばれるようになるのは、震災で各町の山車のほとんどが失われ、代わって俄（二〇加・二輪加とも。にわか芝居、寸劇。踊りのこともあった）や造り物が多くなったことが背景にあるだろう。それ以前にも踊り山車で演じる演目や衣装などには各町が趣向をこらしてきた。また、からくり人形を操る技術や囃子の演奏には力量や練習が必要であるといえ、これには即興性や独自性が出にくい。震災後に増加した俄や造り物は自分たちの工夫を活かす余地が大きいことから、より華美になり、余興（演芸）の面が強

くなっている。震災以後、岐阜まつりに奉納される山車・神輿・造り物などはしばしば「余興」と表現される。これらは伊奈波神社への崇敬として各町から奉納されるものではなく、氏子とともにまつりを楽しむために催される。次項に述べる神幸祭も含めて、宵宮や本祭の奉芸は神社の「縁日」であり、神社の日記には「神賑行事」などとも記されている。

4 祝祭化と地域の拡大

編 民俗』。

震災以後、岐阜まつりに奉納される山車・神輿・造り物などはしばしば「余興」と表現される。これらは伊奈波神社への崇敬として各町から奉納されるものではなく、氏子とともにまつりを楽しむために催される。次項に述べる神幸祭も含めて、宵宮や本祭の奉芸は神社の「縁日」であり、神社の日記には「神賑行事」などとも記されている。

濃尾地震後に「余興」と呼ばれるようになるのは、震災で各町の山車のほとんどが失われ、代わって俄（二〇加・二輪加とも。にわか芝居、寸劇。踊りのこともあった）や造り物が多くなったことが背景にあるだろう。それ以前にも踊り山車で演じる演目や衣装などには各町が趣向をこらしてきた。また、からくり人形を操る技術や囃子の演奏には力量や練習が必要であるといえ、これには即興性や独自性が出にくい。震災後に増加した俄や造り物は自分たちの工夫を活かす余地が大きいことから、より華美になり、余興（演芸）の面が強



資料 2-9 岐阜稲葉神社祭礼山車引出之図（護国寺所蔵）

めに境内に臨時の舞台まで建てられた。舞台はこのちもまつりのたびに設置されている。明治三十三年に鉾の造り物を出した笹土居町では、若者たちは斜子織ななこの着物の袖や腰に一字に模様を染め出して襦袢の帯を締め、年長者は若者と同じ生地の羽織を着て練り歩くという華やかな行列を繰り広げた。明治三十六年には天道町（現在の木造町内）は高さ二間（約3・6m）、横一間の伊奈波神社社殿の模型を造って、忠臣蔵の俄を催すために衣装を注文している。

また、奉芸に芸妓や会社などの職業集団の参加が増え、個人で加わることもあった。前述のように伊奈波神社の周囲は料理屋・芝居小屋が多く、金津廓も近い。明治二十九年の桜町（現在の伊奈波通一丁目）による桜花の造り山車と町内の芸妓総出の手踊り、明治三十二年の金津廓芸妓連の俄、同三十四年の常盤津連中の俄などが新聞に掲載されている。彼女たちは、岐阜まつりにプロの腕前を発揮したのであろう。職域による奉芸は、日本毛糸株式会社の花神輿、岡本太右衛門方工場連があり、大正十四年（一九二五）には青年団のからくり山車・神輿も繰り出した。今小町の茶商は高さ一丈（約3m）の巨大な紙張りの福助を出して人目を集めた。

俄の盛行とともに、警察署は風紀が乱れることを警戒して、明治三十二年以後は毎年、男子の女装・女子の男装などを禁止する命令を出している。

岐阜まつりに懸賞行灯がおこなわれるようになったのは明治三十八年が初見で、のち中断はあっても続けられた。境内の桜は震災で大半が枯死したが、のち植樹された若木が育ち、明治三十八年ころには残っていた老木も花をつけるようになる。大正元年に矢島町から伊奈波神社へいたる道は八間に拡張されたが、その両側には吉野桜が植えられた。これらの桜に岐阜まつり前後の時期の夜間イルミネーションがされるようになったのは大正二年ころらしい。まつりの夜に煙火（花火）をあげるのは、大正十四年が確認できる最初である。もちろん、神社境内および周辺にはたくさんの露店が並び、緑日気分を盛り上げた。

こうして、まつりは楽しさを増し、より娯楽性が高まった。

既述のように明治二十七年には上加納地区からも祭典掛を選任するようになり、このち奉芸町も新たに岐阜市域となった地区へ拡大している（表2-1から3）。大正八年には金神社・溝畑神社・檀森神社の氏子が山車を岐阜まつりに出すことを決めて金津廓・柳ヶ瀬町・神田町三丁目が同意したこと、四月三日に山車が金神社へも行ったこと、翌九年には「金神社山車二町」が奉芸したと（これは稽古に取り掛かっていると報道された神田町一丁目・柳ヶ瀬町一丁目であろう）が新聞に掲載されている。大正九年の新聞には「伊奈波神社・金神社の氏子中の奉芸当番町」と表現されており、両社の氏子とともに岐阜まつりに奉芸当番を担うと認識されていた（大阪朝日新聞東海版 同年四月四日記事）。

奉芸の地域拡大、俄の増加に伴い、本楽の日の奉芸時間も長くなっている。明治三十三年には正午過ぎから当番町が順次奉芸し、終わったのは午後十時であった。

なお、震災前におこなわれていた三日の引初は、明治二十七年以後は実施されていない。ただし、奉芸する各町の山車などは三日から市内を練り回っている。

5 神幸祭と神事

江戸時代にはおこなわれていた神幸祭は、明治中期までは確認できない。その再興は明治三十年であった。震災で焼失した社殿が再営竣工し、正遷宮が挙行された十一月二十三日には、金神社・檀森神社・県神社の神輿が伊奈波神社へ渡御し、翌二十四日午後帰御した。その行列は、大榎を先頭に、伊奈波神社の総代、唐櫃、御幣、伊奈波神社神官、続いて金神社・檀森神社・県神社の神輿がそれぞれの氏子総代や神職とともに連なり、総勢二百人を超えるものであった。

金神社・檀森神社・県神社はいずれも旧上加納村に鎮座し、明治二十二年に



岐阜市が成立すると岐阜市内となった。祭神はそれぞれ、イニシキイリヒコノミコトの後であるヌノシヒメノミコト、二神の御子であるイチハヤオノミコト、イニシキイリヒコノミコトと毛里倫満娘との間に生まれたタラチネノミコトで、イニシキイリヒコノミコトの家族が伊奈波神社にそろったことになる。

このときは、金神社に三社の神輿がそろい、参道を南に下り、東に折れて長良橋通り（当時は「八間道」）に出て南行、停車場（現在の名鉄岐阜駅付近）にいたり、そこから長住町を東に向かい、旧停車場（現在の名鉄各務原線安良田踏切付近）から北上し、江戸時代のメインロードであった「御鯨街道」をへて伊奈波神社に向かった。帰御のときは伊奈波神社から西へ進み、矢島町から南行したと思われる。

翌三十一年四月の岐阜まつりにおける神幸祭についても、二月ころから協議が重ねられた。その結果、四月四日午前七時に伊奈波神社神輿が金神社へ渡御、金神社・檀森神社・県神社の神輿とともに午前十一時に伊奈波神社にいたり、翌五日午前七時に伊奈波神社例祭、九時に金神社ほか二社の神輿が帰御した。まず伊奈波神社から金神社に神輿が渡御したのち、ともに伊奈波神社に向かう点が前年の正遷宮のときと異なる。

このときのルートは、決定まで何度か変更された。伊奈波神社から金神社への往路は、初案ではまっすぐ西行して矢島町から長良橋通りを南行するルートであったが、最終的には伊奈波神社を出て「御鯨街道」をいったん北に向かい、本町通りを西に進んでから長良橋通りを南行するルートに変えられた。翌日の金神社への帰御も、初案は伊奈波神社から西へ出て現在の伊奈波通二丁目と三丁目の間の角で南に進路を変え、上竹町から下太田町へと進み、そこで西に曲がって裁判所前から南進する予定であった。しかし、伊奈波神社の北に当たる末広町から本町通りを経て南進し、上竹屋町・中竹屋町を通る部分が追加された。変更部分はいずれも、伊奈波神社の北部地域に神輿の巡幸範囲を拡大したこと

になる。金神社から伊奈波神社までは前年の正遷宮のときと同じルートであった。沿道に当たる各町には道の掃除と打ち水をし、二階からの拝観は慎むべきことが伝えられた。

翌年以後も、中断やルート・日時などの変更はあるが、昭和十六年まで継続しておこなわれた（表2-14）。昭和十一年以後は、赤口神社（岐阜市本郷町二丁目）が御旅所となっている。明治四十年の神幸祭は、先導・箒・白杖・祓禊・塩湯・各町総代・主鼻・猿田彦神・前駆馬・辛櫃・神輿・旗・真榊・楯・矛・矢・弓・劔・樂人・紫翳（きぬがさ）のあとに市名誉職・祭典掛・神職が続ぎ、鳳輦・神職・氏子・信徒などが行列をなした（岐阜日日新聞 同年三月二十七日記事）。大正七年の神幸祭の供奉人数は数百名に及ぶ。昭和十三年からは供奉の中に稚児・鎧武者も加わっている。

例祭の神事については、明治四十年四月四日の岐阜日日新聞に詳細に報道されている。

四日 奉幣使（例祭に幣帛を捧げるため参向する県庁職員）や神職が斎戒

※この日、神社では午後三時に試楽神事、午後七時に夜宮神事がおこなわれる

五日 早旦 神職は神殿を装飾

午前九時 奉幣使以下は神門外で手水。祓所に着き祓式。奉幣使以下が幣殿に着く。斎主が儀具することを奉幣使に伝える。斎主が鍵を持ち殿に昇り扉を開き（再拝拍手）側に控える（この間奏楽）。神饌を供する（この間奏楽）。奉幣使が幣物を辛櫃から出し仮の案上に置く。斎主が幣物を取り神前の案上に奉る（再拝拍手）。斎主が祝詞を奏する（再拝拍手）。奉幣使が玉串を献じ拝礼。随行員が拝礼。神職・参列員が拝礼。幣物・神饌を撤する（この間奏楽）。斎主が殿に昇り扉を閉じる（再拝拍手）。復坐して鍵を後取に渡す（この間奏楽）

6 奉芸区域の区分けと割当

岐阜まつりに奉芸する町を決めるには難航することもあった。祭典掛は明治二十九年には各区長へ、区内から一町ずつ造り物または俄を出すように依頼している。この区長は、岐阜市制発足とともに市を十五区に分けて各区に置かれたものを指すだろう『岐阜市史 通史編 近代』。明治三十二年には戸数が少なく奉芸が難しい町は赤丸提灯を宵宮に出すことを求めた。

また、新聞には岐阜まつりが年々寂れていくのを嘆く記事も掲載されている。明治四十一年にはその原因を「電話が架設されてから蜘蛛の巣のように張られた電話線がからくり山車や花車^{だし}の曳き回しに障害になること、祭りを喜ばない移住者が増えたこと、教育の普及と人智の発達若くは衆らの自戒を促したこと」に求めている（岐阜日日新聞 同年四月八日投書）。岐阜まつりの雑踏についての報道、祭りへの熱狂ぶりを批判する投書などもあり、この時期の岐阜まつりが「寂れた」というのは当たらないと感じるが、天候、戦争や景気などの社会情勢で人出や奉芸への熱意が左右されて「寂しい」と報道されている年も確かにある。

こうした勧誘活動を省き、例祭をより盛んにするためだろうか、明治三十二年には例祭奉芸の町を十二区に分け、一区から一か町以上が奉芸することとして抽選で奉芸順を決定した（伊奈波神社所蔵文書。このときの区分けは表2-2）。これは「改正」であるが、これ以前の奉芸地域区分けは確認できない（明治二十三年には当番町を決めるのが従来は「不模通」だったので、今年から毎年くじ引きで決定するとしている）。この十二区は、先に述べた岐阜市制発足時の区分けにほぼ準じている。第一区は旧富茂登村、第二から第七区は旧岐阜町、第八区は旧稲束村、第九から第十一区は旧今泉村、第十二区は旧小熊村である。ただし、旧明屋敷村（明治八年に忠節村と合併して稲束村となった）の若松町などは、地域の結びつきの関係から翌三十三年に第六区へ編入されている。こ

のとき、最も長期間の地区で明治三十九年までの奉芸順が決められ、以後の奉芸はほぼこれに従っておこなわれた。

続いて明治四十年には、各区の明治四十年から同四十六年（明治四十五年に大正と改元）までの奉芸順が決議された（伊奈波神社所蔵「伊奈波神社大祭奉芸車楽各町七ヶ年順番決議録」。区分けは表2-3）。このときはそれまでの十二区を十区に編成替えしている。ここで決まった奉芸順は大正二年に一区切りとなる。このうち、大正五年から同九年（同十四年まで書き込み）の「伊奈波神社例祭余興奉芸年番表」（個人蔵）、大正十五年から昭和五年までの年番表『岐阜市史 史料編 近代』掲載が残されている。

7 金神社の祭礼

明治三十一年以後、神幸祭で伊奈波神社と金神社の神輿が互いに渡御するようになったこと、大正八年には金神社・溝畑神社・檀森神社の氏子から岐阜まつりに山車が出され、伊奈波神社氏子の山車なども金神社へ行ったことなどは、すでに述べたとおりである。このことから、岐阜まつりにおける金神社の存在感が大きくなっていく。

大正九年には、宵宮は金神社で三日に、伊奈波神社で四日におこなわれるようになった。金神社の宵宮は大正十一年までは確認できる。

昭和三年、金神社は郷社から県社へ昇格した。翌四年四月の二日・三日には昇格祭を催し、境内で園遊会を開き、芸妓の手踊り、相撲、花火、獅子舞、餅投げ、懸賞神輿などがあつて大にぎわいであつた。神幸祭は表2-4にあげたように、昭和四年には金神社が単独でおこなっているらしい。このうち中絶を経て復活した昭和十一年以後、伊奈波神社の神輿は赤口神社を御旅所としているが、金神社の神輿はそこに渡御はしていないようである。昭和十二年の金神社の神幸祭のルートが分かるが、それは金神社から徹明町通り・金町四丁目から金宝町の御旅所へ着き、そこから金神社へ還御するものであつた（岐阜日日新



聞 同年四月二日記事）。

金神社は県社昇格を契機として、一社として例祭をおこなうようになったといえる。ただ、祭日は伊奈波神社と同じであり、岐阜まつりとしての一体性は保たれている。

8 戦時下の岐阜まつり

昭和十二年、盧溝橋事件を発端に日中戦争が開始し、九月に国民精神総動員運動が始まり、翌年四月には国家総動員法が公布された。昭和十五年に日独伊三国同盟が結ばれ、第二次世界大戦へ突入していく。

このような情勢のなか、岐阜まつりもそれまでの形を大きく変えた。昭和十三年からは山車の奉曳などは無くなり、神事のみが厳粛におこなわれるようになる。四日の神幸祭は昭和十三年から同十五年までは斎行されているが、十六年は確認できず、十七年から中止された。

しかし、時難克服と武運長久を祈る参詣者が多く、岐阜まつりの日には境内で神楽などが催され、満開の桜とともに社頭はにぎわった。繁華街も例年より少ないとはいえ多くの人が訪れたことが昭和十七年までは新聞で報道されている。

第五節 戦後の岐阜まつり

(一) 岐阜空襲の被害

昭和二十年（一九四五）六月ころから中小都市へも空襲が及び始め、同年七月九日・十二日の二度にわたって岐阜市も激しい空襲にあい中心部は壊滅した。このときには、旧岐阜町区域は常盤町など南部の一部を除いて空襲を免れ、伊奈波神社も無事であったが、明治三十九年に新造した松屋町のからくり山車は

焼失（『岐阜市史 通史編 民俗』、金神社もまた焼失した）。

安宅車は空襲以前に実施された家屋強制疎開で山車蔵を失い、屋根だけの小屋に納められてほとんど雨ざらし状態となる『金華史誌』『岐阜市史 通史編 民俗』。若戎車は岐阜空襲の時には、鶯谷随道に疎開させたと語り継がれている。常盤町もしくは金津地区の融のからくり山車も、やはり姿を消したと思われる。

(二) 戦後の岐阜まつりの流れ —平成二十年まで—

中心部が焦土となった岐阜市だが、昭和二十一年四月には早くも岐阜まつりが始まった。翌二十二年には神幸祭が再開、戦災を免れた清影車と踊車が昭和二十五年には姿を見せている。

このち岐阜まつりはどんどん盛んになり、昭和四十八年に道三まつりが始まる。平成八年（一九九六）には岐阜まつりの神幸祭と宵宮・道三まつりが四月第一土・日曜日へ変更され（伊奈波神社・金神社などの神事は従来通り）、平成二十年になって神幸祭の神輿が伊奈波・金・檀森の三社そろって合同渡御をおこなうようになった。本節では、この時点までを扱う。

(三) 再開した岐阜まつり

焦土の中から立ち上がり、苦しい暮らしのなか、昭和二十一年四月に岐阜まつりが再開した。同年四月四日のようすを、翌五日の岐阜タイムスは「平和に迎へた岐阜まつり」と題して報道している。そこには、柳ヶ瀬の繁華街が人びとであふれ、伊奈波神社境内には咲き初めた桜のもとに「ワッショワッショ」と子ども神輿が練り込んでおり、この日ばかりは物資不足も物価高の悩みも忘れて喜ぶ市民の姿が浮かぶ。

昭和二十二年には四月四日に神幸祭が再開されて町内会の花神輿なども繰り出した。翌五日の伊奈波通りは氣勢を上げる神輿、晴れ着の人たちでにぎわい、

この日の参詣者はざっと三万人にのぼった(岐阜タイムス)。

昭和二十四年四月は、四日に神幸祭と境内の奉芸舞台で各務村(現各務原市)青年団・千疋村(現関市)の獅子舞神楽などが演じられ、造り神輿四十〜五十基が社頭に並んで審査もおこなわれた。五日は例祭ののち仏教会の奉納舞踊があり、町には神輿、笛・太鼓・三味線の音があふれ、華陽芸妓が曳き踊る山車が繰り出す。翌二十五年には伝統の山車の奉曳があり、境内に見世物小屋や露店が立ち並ぶ。二十六年には中絶していた伊奈波社頭の夜桜ライトアップが再開した。このころには、戦前の岐阜まつりのにぎわいがほぼ再現された。

昭和二十六年三月に岐阜まつり振興会が配った「岐阜まつりを盛んに行いませう」というチラシが残されている(個人蔵)。そこには、懸賞造り神輿、山車・造り山車への補助金交付、煙火の打ち上げと、「其の他協賛行事」として美人変装探し・舞踊・歌謡曲が柳ヶ瀬地区一帯で実施されると謳ってある。この振興会は昭和二十四年ころに始まり、岐阜商工会議所内に事務局が置かれていた。二十四年度の岐阜商工会議所の事業報告には「商工業振興対策」として「岐阜まつり振興会に協力して、岐阜市商店街の購買力打開策に協力した」ことをあげている『岐阜商工会議所七十年史』。前述のチラシ冒頭には、祭りを盛り上げ「市民の皆様喜んで頂くと共に観光都岐阜の発展に寄与」するための協力を呼び掛けている。戦前の岐阜まつりにも市外から多くの見物客が訪れているが、戦後の岐阜まつりは伊奈波神社のまつりを核としつつも、商業・観光ペースで再開された。戦災と敗戦で大きな痛手を受けた岐阜市の経済的復興に、岐阜まつりが寄与することが期待されていたといえる。

(四) 伊奈波神社の神事

戦後における伊奈波神社の例祭神事は、次のように斎行されている。

四月四日 発輦祭、神幸祭、還幸祭(これらについては後述)。前夜祭(神楽)。

このち宵宮となる。

四月五日 例大祭。このようすは昭和三十八年四月六日の岐阜日日新聞に、本殿の扉が開かれ、宮司の祝詞のあと神社庁の献幣使が金幣を献上、氏子代表が氏子幣を捧げ、神楽奉納、関係者の玉串奉納と報道されている。戦前にあつた県庁からの奉幣が、神社庁の奉幣に替わった以外は、大きな変更はない。このち神賑行事となる。

道三まつり・岐阜まつりの宵宮と神幸祭が四月第一土・日曜日に変更されてのちは、曜日に関わらず四日に前夜祭、五日に例大祭がおこなわれ、神幸祭や宵宮は四月第一土曜日となる。

(五) 道三まつりが始まるまでの岐阜まつりの特徴

1 伊奈波神社の求心力の強まり

造り神輿コンクールは昭和二十四年から始まったらしい。その入賞者の新聞報道を見ると、伊奈波神社に奉納される神輿の地域は戦前よりも広がっているのが分かる。戦前にも長良地区から神輿の練り込みがなされたのは確認できるが、戦後は長良地区だけでなく鷺山・梅林・鍵屋・加納など、岐阜市の北部・岐阜駅南部へと拡大した。伊奈波神社から離れた地域からも、多くの神輿が練り込まれたのである。

また、大人の造り神輿の参加者は、町内会以外に青年団・消防団や会社・商業団体など多様であり、のちの神輿パレードへとつながる傾向が表れている。

2 催しの多様化

戦前に多かった造り山車・俄や行列に加えて、のど自慢大会、美人変装探し、商店街連盟による景品引き換え券配布など新しい催しが登場した。

昭和二十八年からは信長行列と信長追悼行事が加わる。追悼行事および宝物展は崇福寺(岐阜市長良福光)で四月三日に、信長行列は四月五日に実施された。



騎馬武者と槍隊・鉄砲隊がホラ貝・陣太鼓を先頭にして進む行列は、岐阜駅から柳ヶ瀬を経て伊奈波神社へ（岐阜公園までの年もある）いたるもので、昭和三十一年には行列人数は三百名にものぼった。岐阜まつり振興会によるこのころのチラシ（個人蔵）には「岐阜市発展の礎を成した織田信長公に関する行事を中心として、本市独自の「岐阜まつり」を実施し、岐阜市商工業の振興発展に資することを目的とする」と書かれている。信長行列は昭和三十一年の新聞報道では「お祭りのヤマ」とまで表現されているが、翌三十二年から秋の「ぎふ信長まつり」が始まるとともに、岐阜まつりではおこなわれなくなった。

3 まつりの面的拡大

昭和二十五年には市内各所で楽曲を披露するオーブン演奏会が実施された。これは戦前の流し俄の系譜をひくものといえるだろうか。これ以後、岐阜市公会堂（岐阜市美江寺町。現在の岐阜市民会館の前身）でミス岐阜の発表会と歌謡ショー、岐阜市民センター（岐阜市金町。現在の岐阜市文化センターの前身）でプロレスや日米合同演奏会、自転車まつり、橋幸夫ショーなどが岐阜まつりの日に開催されている。昭和三十八年には岐阜駅・岐阜公園など各所で谷汲踊りが披露された。同四十一年には柳ヶ瀬の丸物百貨店で美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」発表会。前述の信長行列も岐阜駅を中心街を通ったが、これが無くなつてのちは神幸祭がより盛大になり、昭和三十九年からはブラスバンド・バトンガール・鼓笛隊などによる「日の丸大パレード」が伊奈波神社を出発して目抜き通りを行進した。

このように、伊奈波神社とは直接関わらない性格の催しが増え、まつりをより盛り上げるために神社から離れた地域でも盛んにおこなわれるようになった。これらは、のちの道三まつりへと直接つながっていくものといえよう。

（六）神幸祭の移り変わり

戦時下で一時中断していた神幸祭は、昭和二十二年に再開した。このときの渡御順路は不明だが、翌二十三年には伊奈波神社の神輿が金神社・樫森神社へ渡御したことが確認できる。こののちも両神社へ渡御することは変わらないが、昭和三十三年には赤口神社（岐阜市本郷町二丁目）、同三十四年には北野神社（岐阜市菅原町三丁目）が巡幸ルートに入っている。両社とも伊奈波神社と格別の由緒はないが、巡幸ルートに近いことから立ち寄ることになったのだろう。のち、赤口神社には毎年、北野神社には隔年で巡幸するようになった。

昭和三十五年からは、神幸祭に先立って発輦祭（発輦祭とも。昭和二十四年

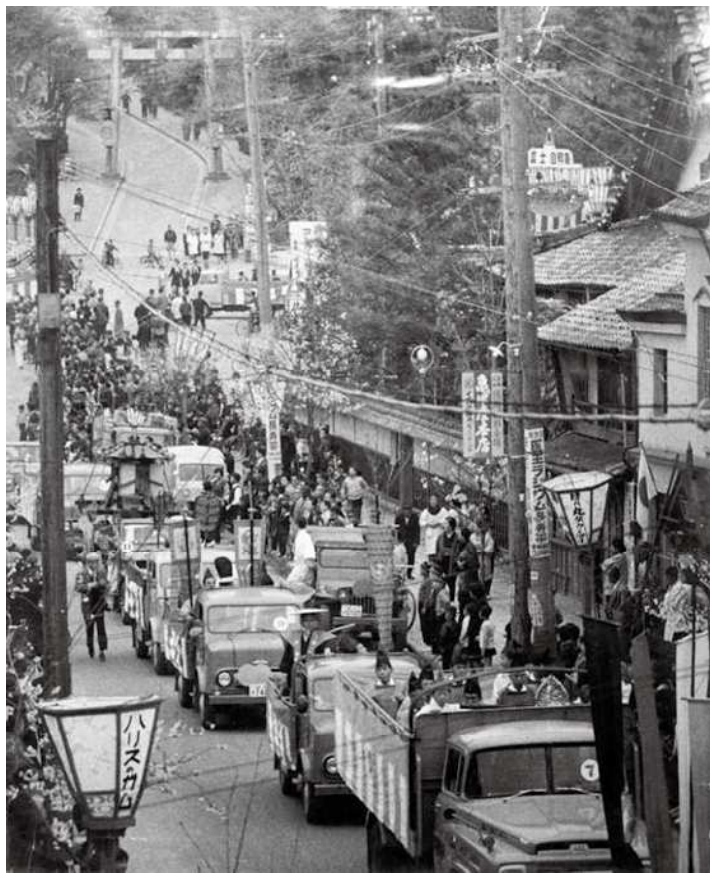


写真 2-1 参道を下る神幸祭行列（昭和 35 年ごろ）（伊奈波神社所蔵）

におこなわれているが、のち中断したと思われる、伊奈波神社に還御してのち還幸祭が斎行されるようになる。発輦祭は神霊を神社境内の神橋前に据えた鳳輦に奉遷する儀式で、のち神橋前で修祓があつてから神幸祭の行列が発する。還幸祭は還御した鳳輦を神橋前に安置して拝礼し、神霊を本殿にお戻して神楽が奉納された。

昭和三十三年の神幸祭は、雅楽が奏でられるなか、獅子、猿田彦、錦旗に「ほろ」「みこ」数百名が続き、神主ら祭典関係者二十数名が騎馬で巡幸した。昭和三十四年からは、神幸祭に自動車を導入される。これは岐阜タイムス社の宣伝カーを先導に、神主・稚児ら約千人の行列で、鳳輦はこのために新調した台車に安置し、別の車で牽引した。この年には鳳輦以外は徒歩であつたが、翌年には神職・氏子総代なども車に乗り、オープンカー二十九台を連ねた「新企画」の神幸祭となつた。同じ年には前述した発輦祭・還幸祭も始まつている。昭和三十二年以後は信長行列が岐阜まつりから姿を消したため、神幸祭をまつりの花形とする演出だつたのではないかと思われる。あるいは、前年に日本全国を熱狂させた皇太子御成婚パレードに着想を得たのかもしれない。車の数は年により異なるが、およそ二十から三十台余であつた。しかし、昭和四十四年には交通事情により十五台に減らされ、これ以後は十数台となつている。

(七) 山車と神輿

戦後、最初に曳き出されたのは清影車と小熊町の山車の二台であつた。小熊町は昭和三十年には子ども踊りの山車を出しており、これが現在の踊車である。戦後の山車の奉曳は表2-15のとおりである。当時の新聞記事・『金華史誌』と、昭和三十九～四十一年および同四十六年以降は社務日誌（伊奈波神社所蔵）をもとに作成したもののだが、報道で漏れている年（表では空欄とした）でも山車が奉曳されている可能性が大きい。また、奉曳町が分かるだけで、どの山車

を曳いたか確定できないものは、推定を（ ）で示している。

安宅車は本町五丁目（旧 車之町）所有であつたが、曳き出すことにも費用がかかるうえ、修復・維持が困難となつて、昭和三十七年の岐阜まつりの宵宮と本楽の日に曳き出し、そのまま四月五日に伊奈波神社へ奉納された。このとき神社前広場に山車蔵も新築されている。伊奈波神社では、祭り囃子保存会をつくり、当番町を決めて毎年曳き出す計画と伝えており（岐阜日日新聞 昭和三十七年四月三日記事）、これ以後の岐阜まつりには毎年姿を見せた。昭和四十六年などには京町地区が安宅車、金華地区は清影車を曳いているが、それ以外は金華地区が奉曳を担っている。

若戎車（蛭子車）は昭和三十二・三十九年に大門町が奉曳したと推定され、同三十五・四十二年に金屋町が奉曳している。しかし同四十二年には伊奈波神社所有として今沢町が奉曳しているので、このころに伊奈波神社に奉納されたのであろう（山車の名はこの時点で「若恵比須」となっており、昭和四十六年以後の伊奈波神社の社務日誌でも「若恵比寿」である）。翌四十三年からは明徳地区氏が奉曳してきた。ただし、からくり奉納はできなかったが、平成四年に人形二体を復元修理して、この年の岐阜まつりから愛らしい若戎が舞うからくりが披露されるようになった。

清影車は昭和二十五年以来、五回は川原町の三町（湊町・玉井町・元浜町）が奉曳している。しかし昭和三十四年の伊勢湾台風でからくり人形が大きな被害を受けた（このうち、一時期は山車上に替わりの人形を飾っていたらしい）。同四十二年には三町合同で奉曳されたが、翌年には京町地区の奉曳と思われる。おそらく、このころに清影車も伊奈波神社へ奉納されたのであろう。このうち、前述のように金華地区と曳き手が替わる年もあつたが、ほとんど京町地区の氏子により岐阜まつりに曳き出されている。平成八年に京町地区から、からくり人形の復元について伊奈波神社へ要望が出された。この時点で安宅車・若戎車



ではからくりが演じられており、清影車のみからくり人形がないのは残念だということであった(伊奈波神社所蔵「役員・総代会議事」)。この議案は承認され、伊奈波神社の板絵(資料216)をもとに人形が復元されて平成十年に三十八年ぶりに豊玉姫のからくり人形が舞を見せた。

踊車は昭和四十二年まではほとんど小熊町が曳き出しているが、同四十三年の曳き手は本郷と思われる。やはりこのころに伊奈波神社に奉納されたのではないだろうか。同四十五年には伊奈波神社神賑会が担当して同六十二年まで続けられた。この時期の山車は「福槌車」と表現されており、現在も踊車の上に飾られる金色の大きな槌がすでに載っていたのであろう。昭和六十三年には神賑会とボーイスカウト、それ以後はボーイスカウトが曳き手となって現在に及んでいる。

いずれの山車も何度も大きな修理を重ねながら現在まで続けられてきた(山車・人形の修復については第四・五章)。操車技術・人形操作や囃子の稽古、曳き手の確保などの努力に加え、山車や人形の修復、からくり人形の復元、囃子の生演奏の復活などには、神社に奉納する山車にかける住民の心意気を感じることができよう。

かつて岐阜まつりに練り回った神輿のうち、木造町の神輿は昭和二十二年にまず姿を見せた『岐阜のまちに神輿が復活するまで「神輿大好き」』。ついで昭和四十年四月五日に、隣の町内からも応援を受けて再び練り出されたが、このときの新聞記事では「昭和二十九年に練り出して以来」と書かれている(岐阜日日新聞)。これ以後、昭和五十四年からは岐阜青年会議所メンバーなどが担ったが、その後は木造町内で展示するのみとなっていた。しかし昭和六十三年、岐阜市制百年を機会に復活して岐阜まつりの宵宮に練り込まれた。

また、伊奈波神社が国幣小社に昇格したのを記念して昭和十五年に奉納された伊奈波神社本神輿は、昭和五十一年の岐阜まつり宵宮に岐阜青年会議所が借

り出して市内を練った。のち一時期は問屋町に譲られていたが、現在は「金華神輿」として岐阜まつり宵宮に練り込まれる。

平成七年、岐阜神輿愛好会(岐阜神輿連)が結成された。平成八年の宵宮では練り込む神輿が増え、現在もおこなわれる神輿練りコンクールが始まって一層の盛り上がりを見せることになった。

このほか、子ども神輿、大人神輿は造り神輿コンクールの開催もあって、昭和二十八年には数十基、同三十四年には百基以上を数えるほどになる。同四十年にコンクールが中止されると数は減少するが、道三まつりの始まりとともに再び盛り返しを見せた(詳細は第一章第四節参照)。

(八) 道三まつりの開始と土・日曜日開催への変更

昭和四十八年、道三まつりが始まった。これは前年のNHK大河ドラマ「国盗り物語」を直接の契機とするが、道三が伊奈波神社を現在地へ遷座したというゆかりがあることも背景にあったかもしれない。

道三まつりの詳細は第一章第四節に譲るが、この始まりとともに岐阜まつりにおける神社境内での催事は数を減らしている。もちろん山車の奉曳やからくり奉芸、神輿の練り込み、花火打ち上げはあるが、演芸や踊りなどが姿を消した。数を増やしてきた子ども神輿・大人神輿が集まる「みこし広場」は第一回の昭和五十三年には伊奈波神社境内に設けられたが、同五十五年には神田町通りに変更されている。新聞報道でも、神幸祭があまり取り上げられず、歩行者天国や神輿パレードなどが大きな割合を占めるようになった。

岐阜まつりの宵宮は、昼間の華やかな行事が一転した幻想的なものとして報道されている。昭和五十八年四月六日の岐阜日日新聞には「まつりの本家はどちら? 商工パワーに伝統かすむ 時代のすう勢反応さまじま」のタイトルで、「道三まつりと同日だと華やかさの点で岐阜まつりは陰に隠れてしまう。道三まつ

りの日程をずらしてもいいのでは」との伊奈波神社宮司の意見、「岐阜まつりだけで、これだけの人は集まらない。決して神事をないがしろにしているわけではなく、時代に合ったまつりの形がある。市民が盛り上がりげれば、それもまつりの一つの姿だと思う」との岐阜商工会議所事務局長の意見が掲載されている。

このような状況の中、すでに昭和五十四年には「まつりを四月第一土・日曜日にするよう働きかけていきたい」と岐阜青年会議所文化財特別委員会委員長が話している（岐阜日日新聞 同年四月四日記事）。平成七年（一九九五）十一月に伊奈波神社責任役員会議では、岐阜まつりを四月第一土・日曜日に変更したいとの岐阜まつり協賛・道三まつり実行委員会などからの依頼を受け、「市民の声であり、商店街・企業も多く参加できる。時代の流れ」として了承した（伊奈波神社所蔵「責任役員会議事」）。これにより翌平成八年から、神幸祭・宵宮は四月四日から四月第一土曜日へ変更し、例大祭はそれまでと変わらず四月五日に斎行されることとなった。

このうち、平成十一年には神幸祭における徒歩での練り歩きが榎森神社から赤口神社の区間で復活する（のち区間の変更あり）。さらに、平成十九年に伊奈波神社と金神社の鳳輦が神田町通りを並んで渡御することとなる。伊奈波神社の鳳輦は金神社の鳳輦と神田町で別れ、榎森・北野・赤口神社へ巡幸して伊奈波神社に還御した。翌二十年には伊奈波・金・榎森の三社の鳳輦がそろって渡御し、若宮町交差点で三社合同祭典をおこなう現在の形になる。これは神輿パレードにおいて神社の存在感を高める意義があり、岐阜まつりの新たな一ページともなった。

（史料）

『日本書紀』 新日本古典文学大系30 岩波書店、一九九六年
市木武雄『梅花無尽蔵注釈』第四巻 続群書類従完成会、一九九四年

『尾濃葉栗見聞集 岐阜志略』 一九三四年に平塚正雄により編纂発行

『美濃国古蹟考』 郷土出版社、一九八八年

『濃州徇行記 濃陽志略』 一九三三年に平塚正雄により編纂発行

『美濃明細記 美濃雜事紀』 一九三三年に平塚正雄により編纂発行

三代目中村仲蔵『手前味噌』 青蛙房、一九六九年

『下佐波村 青木久兵衛日記（抄）』〔二〕岐阜大学教育学部郷土資料12、岐阜大学教育学部、一九八一年

西村寛良解説・解説『加納藩士 田辺氏見聞録』 岐阜県郷土資料研究協議会、一九八二年

（参考文献）

『岐阜市史』 岐阜市役所、一九二八年

稲葉繁吉編纂・発行『岐阜米屋町史』 一九三五年

『伊奈波神社略誌』 国幣小社伊奈波神社、一九四一年

『岐阜商工会議所七十年史』 岐阜商工会議所、一九六三年

平塚正雄『濃飛史譚』 岐阜県人協会、一九六七年

平田穰「常盤町軼事 祭典記録」 一九六八年

藤田黎三「美濃地方の山鉾の分類と分布」『美濃民俗』一一五号、一九七六年

和田唯男「山車の譲渡移行追及異聞覚書」 同前

『岐阜市史 通史編 民俗』 岐阜市、一九七七年

『岐阜市史 通史編 近代』 岐阜市、一九八一年

「高見のみこし 長良のみこし」 高見青年団OB会、一九九一年

『金華史誌』 金華史誌編集委員会、一九九三年

清信重『ふるさと岐阜の物語』 福富屋、一九九四年

清信重著・発行『ふるさと岐阜の物語（大正編）』 一九九五年

『岐阜町金華の誇り』 NPO法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館、二〇〇九年



寛真理子「近世岐阜町の成立と岐阜奉行」岸野俊彦編・清文堂出版発行『尾張藩社会の総合研究』第四編所収、二〇〇九年

伊藤泰雄『岐阜のまちに神輿が復活するまで「神輿大好き」』伊藤泰雄デザイン室、二〇一五年

第二章 岐阜まつりの歴史



表 2-1 各町の幸納（江戸時代から明治 39 年まで。明治 32 ～ 36 年は表 2-2）

旧町村	町名	享和町名 (明治 42 年 まで)	享保 10 (1725)	文化 10 (1813)	伊奈波神社例祭 (資料 2-4)	岐阜国難御神事 (資料 2-5)	明治 5 (1872) 伊奈波神社略誌	明治 18 岐阜日日新聞	明治 21 岐阜日日新聞	明治 22 岐阜日日新聞	明治 23 例祭関係書籍編纂	明治 23 からくり人形板絵 (資料 2-6)	明治 24 例祭議決之書編纂 岐阜日日新聞	明治 24/26 濃尾震災	明治 27 例祭経書編纂	明治 39 山車引出之図 (資料 2-9)
中河原 新田		玉井町						からくり山車 ※1 明治 6 / 9 新造	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (清影車)	からくり山車 (清影車)			からくり山車 (清影車) ※1 明治 37 / 38 新造
古屋敷 新田		渡町 元浜町													造り物と供 造り物と供	造り山車 (宝船)
明屋敷村		四屋町							坂屋町 (茶屋町) 神奥						造り物と供 上茶屋町など 8 か町で神奥	造り山車 (神馬)
岐阜市 (町名は 岐阜市志 略に 掲載順に 記載)	下笹土居町	笹土居町		からくり山車 新造	人形山車 (二福神) 名古屋型	供え物	からくり山車		からくり山車 (二福神)		からくり山車 (二福神)	からくり山車 (二福神)	からくり山車 (二福神)		造り物と供	造り山車 (石橋)
	上笹土居町	常盤町			踊り山車か 長浜型か 長浜型か	踊り山車	踊り山車				踊り山車	踊り山車	踊り山車		造り物と供	造り山車 (神馬)
	白木町				踊り山車 (歌舞伎の 長浜型)	踊り山車	踊り山車		踊り山車				踊り山車		造り物と供	造り山車 (雪洞鉄納)
	米屋町				人形山車 (廻り明) 名古屋型	人形山車 ※2 明治 10 年ころ 加納天神町へ売却	からくり山車				からくり山車	からくり山車 (御霊花)	からくり山車 (御霊花)		からくり山車	造り山車 (神馬)
	飯屋町	鞠屋町			人形山車 (廻り明) 名古屋型	人形山車 (廻り明) 名古屋型	人形山車				からくり山車	からくり山車 (御霊王車)	からくり山車 (御霊王車)		造り物と供	造り山車 (担子孔蓋)
	魚屋町				人形山車 (輪吹き舟子) 名古屋型 ※3 明治 7 / 10 常盤 町 (美濃市) へ売却			造り物					造り物 (曳)			
	久屋町				人形山車 (尚花?) 名古屋型	踊り山車							踊り山車			踊り山車 (元持踊り・御霊納)
	西材木町				人形山車 (聖々) 名古屋型	人形山車				からくり山車		からくり山車 (聖々車)	からくり山車 (聖々車)			
	栄材木町		からくり山車 (御霊)		踊り山車 屋根なし	踊り山車			踊り山車				踊り山車			
	上大桑 (久和) 町		からくり山車 (白蛇)		人形山車 (御霊) 名古屋型 ※4 明治 11 年売却	人形山車			からくり山車			からくり山車	からくり山車			からくり山車 (天神)
	中大桑町				人形山車 (御霊) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (御霊車)	からくり山車 (御霊車)			からくり山車 (唐子人形)
	下大桑町				踊り山車 屋根なし	供え物							造り物			
	下竹屋町	松屋町			踊り山車 屋根なし	踊り山車							踊り山車		造り物と供	からくり山車 (軒子の欄干) ※5 明治 39 年新造
	中竹屋町				人形山車 (布袋尊子) 名古屋型	人形山車 (布袋尊子) 名古屋型		からくり山車	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (道公車)	からくり山車 (道公車)			造り山車 (猪飼馬)
	上竹屋町				踊り山車 (歌舞伎) 長浜型	踊り山車か 長浜型	踊り山車			踊り山車		踊り山車	踊り山車		餅敷縄の献供	
	布屋町				神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥			
	鉢屋橋町															
	上矢島町	篠原町			踊り山車 屋根なし	踊り山車	踊り山車				造り物	造り物	造り物			
	中矢島町	加茂町			人形山車 (加茂) 名古屋型	人形山車				からくり山車		からくり山車 (加茂車)	からくり山車 (加茂車)	→	※6 明治 27 / 30 間町へ売却	
	下矢島町 上段	相生町			神 (下矢島町)	神飾り			神		神	神	神			
	下矢島町 下段	矢島町			神奥 (下矢島町)	神奥				神奥		神奥	神奥		造り物と供	造り山車 (鏡の上に鏡子)
	菰右衛門町															
	今町北之端 (北々町)							造り物					造り物			からくり山車 (鞍馬山)
	上今町				人形山車 (小殿治) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車			からくり山車	からくり山車 (小殿治車)	からくり山車 (小殿治車)		造り物と供	

岐阜市(市名は「岐阜志略」掲載順に記載)	中今町				人形山車(胡蝶カ) 名古屋型	人形山車(題不明) 名古屋型	人形山車				からくり山車 ※7 明治22年竣工		からくり山車 (胡蝶車)	からくり山車 (胡蝶車)			
	下今町						供え物				造り物	鏡餅		鏡餅		御祝献供	造り山車 (太刀を家上する宮主)
	加和屋町					踊り山車 屋根あり	踊り山車	踊り山車				踊り山車	踊り山車	踊り山車		造り物と俵	
	本町				人形山車(題不明) 名古屋型	人形山車(鞍馬山) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (鞍馬車)	からくり山車 (鞍馬車)	からくり山車 (鞍馬車)		酒を供える	からくり山車 (鞍馬僧正坊)
	釜石町				人形山車(弁慶) 名古屋型	人形山車(美経弁慶) 名古屋型	人形山車				からくり山車		からくり山車 (弁慶車)	からくり山車 (弁慶車)			
	船泊屋町					人形山車(大黒唐子) 名古屋型	踊り山車				踊り山車			踊り山車			
	車之町					造り山車カ(御幣)		からくり山車	からくり山車 ※明治21年に改装 して安宅車となる		からくり山車	からくり山車 (駒進帳)	からくり山車 (駒進帳)	からくり山車 (駒進帳)	→	からくり山車	からくり山車 (安宅)
	七番町						供え物	踊り山車			造り物			造り物			
	上ッ門町						供え物										
	上新町					鷹簀行列	踊り山車				造り物		造り物	造り物			
	中新町				人形山車(題不明) 名古屋型	人形山車(寿山) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (寿山車)	からくり山車 (寿山車)	からくり山車 (寿山車)			造り山車(鏡献上)
	大工町					踊り山車 屋根なし	供え物	踊り山車			造り物			造り物			
	下新町					踊り山車 屋根なし	踊り山車				踊り山車			造り物(踊りトナリ)			造り山車 (桃太郎宝取り)
	東福橋町	大和町															
	西福橋町	岡之町															
	米屋橋町	栄吉町															
	矢島橋町	柳町															
	木造橋町	木造町					神輿	神輿	神輿		神輿		神輿		神輿		
	東土居原 横町	坂町															
	西土居原 横町	栄町															神輿
	(旧松島 御行所跡)	末広町						造り山車(花柳)						造り物		赤り物 (長9尺の笠) と俵	
	(唐光寺大門)	坂町									造り物		造り物				造り山車(権御旗)
小森村	小森町						踊り山車				踊り山車		踊り山車				造り山車(長足に曳)
	中鉄屋町	金屋町 1丁目					踊り山車		踊り山車				踊り山車		→	下山車に造り物 と俵	からくり山車 (蛸子の横約)
	下鉄屋町	金屋町 2丁目						踊り山車					踊り山車				からくり山車 (御宮が天神になる)
		南沢・堀川・ 堀川端 鉄屋横町															
忠節村		忠節町							神輿							神輿	神輿
今泉村		上太田町														旗	造り山車 (轡の上に鞍子)
		栄江寺町														造り物 (牡丹寄獅子) と俵	轡臺
		釜町														造り物と俵	造り山車(金銅龍)
		泉町														造り物と俵	
		七軒町														造り物と俵	造り山車(司馬軍公)
		下竹町														造り物と俵	
		中西野・ 下西野町														造り物と俵	
	上加納村	美園町							神輿								

例祭関係書類・例祭議決之書類留・例祭能事記録は伊奈波神社所蔵。明治23年の「からくり人形坂絵」はこの年に奉告した町ではなく、人形のみが描かれている。明治24年の赤字は実際に奉納した町。
※1 清影車付風の「玉井町」札裏書 ※2 岐阜米屋町史 P63 ※3 荒瀬町町史 祭典記録 ※4 例祭関係書類留 3月5日議決 ※5 岐阜市史 通史編 民俗 P264 ※6 岐阜日日新聞 明治27年3月20日記事 ※7 例祭議決之書類留 3月14日記事



表 2-2 明治 32 年の区分けと明治 36 年までの奉納内容

区	構成町 () 内は明治 33 年の変更	明治 32 年 (1899)	明治 33 年 (1900)	明治 34 年 (1901)	明治 36 年 (1903)
第 1 区	玉井、湊、元浜、上・下茶屋、木挽、山口、益屋、大宮上・下、松ヶ枝、山下	玉井町 (象の造り物)	上茶屋町 (からくり山車)	湊町 (唐獅子の造り山車と俄)	元浜町 (金時の造り物と俄)
第 2 区	北・上・中・下今、東材木、加和屋、上新、上大久和	中今町 (布袋の軍配のからくり山車)	上今町 (布袋の造り物)	東材木町 (牛の造り山車と俄)	上新町 (からくり山車と俄)
第 3 区	大工、西材木、中・下大桑、魚屋、釜石、久屋、中新、蜂屋、本	大工町 (からくり山車)	西材木町 (からくり山車)	下大桑町 (手踊り山車)	釜石町 (福槌の造り山車と俄)
第 4 区	米屋、鞆屋、上・中竹屋、間之、大和、愛宕、末広	米屋町 (二福人からくり山車)	鞆屋町 (狸々に瓶)	中竹屋町 (からくり山車)	末広町 (三宝に鏡餅の造り物)
第 5 区	常盤、笹土居、白木、桜、万力、扇	常盤町 (融のからくり山車)	笹土居町 (鉾の造り物)	白木町 (鷹の造り山車と俄)	常盤町 (からくり山車)
第 6 区	矢島、栄、堀江、若松、松屋、木造、相生、榊、(天道、若松、十二軒屋)	矢島町 (若松日出に鶴と俄)	栄・堀江・若松の三町 (生花)	松屋町 (鯨の造り山車と俄)	相生町・榊町 (桜餅の造り物と俄)
第 7 区	車之、加茂、鍛冶屋、珠城、七曲、下新	車之町 (安宅車)	加茂町 (蜻蛉に地球の造り物)	鍛冶屋町 (からくり山車)	七曲町 (兎の造り物と俄)
第 8 区	稲東区、四屋	四屋町 (造花神輿と神馬)	四屋町 (大虎の造り物)	忠節町 (神輿)	(休み)
第 9 区	上・中・下西野、今泉、本郷、今川・上今川、海老河戸、不動、京・南京・北京・西京、日吉、堤下、桑名	中西野町 (大黒の大福槌)	京町・今川町 (巫女)	中西野町 (天狗面の造り山車)	下西野町 (からくり山車)
第 10 区	今小町、美江寺 1・2 丁目、緑、西伊吹、本橋詰	今小町 (大鳥籠に花車と俄)	美江寺町 2 丁目 (狸々の大瓶の造り物)	美江寺町 1 丁目 (からくり山車)	西伊吹町 (からくり山車。車之町から借用)
第 11 区	上・下太田、上・下竹、泉、七軒、室	上太田町 (からくり山車)	下竹町 (達磨の造り物)	下太田町 (手踊り山車)	七軒町 (唐獅子の造り物)
第 12 区	中・下鉄屋、小熊	中鉄屋町 (旧踊り山車台に紙雛造り物と手踊り)	小熊町 (釵に蛇の造り物)	下鉄屋町 (からくり山車)	小熊町 (鶴籠の造り物と俄) 多賀町 (神輿)
番外		茶商林六蔵 (大福助)	木造町・忠節町・東川端町・才勝 (神輿)	上加納区内金津青年会 (融のからくり山車)	天道町 (社殿模型と俄)
		金津廓芸妓連 (俄)	金津町 (浦島太郎玉手箱)	常磐津連中の俄	本橋詰町 (手踊り山車)
典拠		新聞記事	新聞記事	新聞記事・例祭関係書類 日誌 (伊奈波神社所蔵)	新聞記事・例祭関係書類 (伊奈波神社所蔵)

表 2-3 明治 40 年の区分けと大正元年までの奉納内容 ※大正 2 年以後も奉納はあるが、内容が不明のため掲載していない

区	構成町	明治 40 年 (1907)	明治 41 年 (1908)	明治 42 年 (1909)	大正元年 (1912)
第 1 区	湊、中川、元浜、玉井、松下、益屋、大仏、梶川、大宮、松ヶ枝、富茂登、木挽、山口、上・下茶屋	湊町 (からくり山車)	元浜町 (からくり山車)	玉井町 (からくり山車)	山口町 (からくり山車)
第 2 区	北・上・中・下今、加和屋、東材木、上大久和	中今町 (からくり山車)	上今町 (からくり山車)	加和屋町 (造り物)	北今町
第 3 区	大工、中・下大桑、上・中新、魚屋、西材木、久屋	下大桑町 (からくり山車)	上新町 (大鈴の造り物)	魚屋町 (胡額の造り物)	中新町
第 4 区	布屋、蜂屋、甚衛、鍛冶屋、釜石、七曲、上ヶ門、本、下薪、車之	布屋町 (神輿)	鍛冶屋町 (高麗狗の造り物)	釜石町 (造り物と手踊り)	車之町
第 5 区	松屋、愛宕、榊、上・中竹屋、大和、間之、末広、靱屋、米屋	松屋町 (からくり山車)	愛宕町・榊町 (神輿)	上竹屋町 (錦旗)	中竹屋町 (からくり山車)
第 6 区	常盤、相生、笹土居、珠城、加茂、白木、桜、万力、栄、扇、堀江	常盤町 (からくり山車)	相生町	笹土居町 (人形の造り物)	桜町・万力町
第 7 区	木造、若松、啓運、緑、柳、西野 1～8 丁目、御杉、不動、伊吹 1・2 丁目、四屋、矢島、天神	木造町ほか 6 町聯合 (神輿)	緑町・柳町 (献納品)	中西野町 (荷太鼓)	矢島町 (造り物)
第 8 区	金屋横町、大門、初音、下太田、今沢ノ横町 4 軒、多賀、藍川、柳沢、今沢、秋津、小熊、金屋 1・2 丁目	金屋横町ほか 2 町聯合 (神輿)	下太田町 (献納品)	多賀町 (献納物)	金屋町 1 丁目 (造り物)
第 9 区	司、岩根、泉、七軒、上・下竹、上太田、京 1・2 丁目	司町・岩根町 (献納物)	泉町 (随神の造り物)	七軒町 (献納物)	京町 1 丁目 (石製獅子)
第 10 区	今川 1・2 丁目、海老、梅ヶ枝、鷹見、明徳、本・東・南橋詰、美江寺、今小町、本郷 1・2 丁目、堤下、小屋前、室	今川町・海老町 (献納物の花車)	梅ヶ枝・鷹見・明徳 3 町聯合 (献納品)	端詰町 (大幕献納)	本郷町ほか 4 町
番外		加和屋町の慢狂連 (大桜と瓢の造り物)		俄	
典拠		新聞記事	同左	同左	同左



表 2-4 神幸祭の変遷 ※日は予定を含む。実際には天候による順延あり

明治 31 年	1898	本文に記載
明治 32 年	1899	4 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。祭典後に両神社と樫森神社・県神社の神輿がそろって伊奈波神社へ。午後、金神社など 3 社の神輿は還御
明治 33 年	1900	3 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。祭典後に両神社と樫森神社・県神社の神輿がそろって伊奈波神社へ。4 日午前、金神社など 3 社の神輿は還御
明治 34 ～ 36 年	明治 32 年に同じ	
明治 37 年	1904	戦時（日露戦争）につき中止
明治 38 年	1905	明治 32 年に同じ（樫森・県神社については確認できない）
明治 39 年	1906	伊奈波神社から金神社へは渡御せず、金神社からは伊奈波神社へ渡御
明治 40 年	1907	4 日に伊奈波神社・金神社の神輿が樫森神社へ。祭典後に伊奈波神社神輿のみ伊奈波神社へ還御
明治 41 年	1908	明治 40 年に同じ
明治 42 年	1909	4 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。祭典後に両社神輿が伊奈波神社へ（午後、金神社神輿は還御か）
明治 43 年	1910	4 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。樫森神社へも神幸
明治 44 ～ 大正 4 年	不明	
大正 5 年	1916	4 日午前に神輿が伊奈波神社から樫森神社へ
大正 6 年	1917	4 日午前に伊奈波・金神社の神輿が樫森神社へ。祭典後に伊奈波神社神輿のみ伊奈波神社へ還御か
大正 7 年	1918	大正 6 年に同じ
大正 8 年	1919	4 日午前に神輿が伊奈波神社から樫森神社へ。祭典後に伊奈波神社神輿のみ伊奈波神社へ還御か
大正 9 年	1920	不明
大正 10 ～ 13 年	4 日に神幸祭は斎行するが詳細不明	
大正 14 ～ 昭和元年	大正 5 年に同じ	
昭和 2 年	1927	諒闇中につき中止
昭和 3 年	1928	不明
昭和 4 年	1929	4 日に神幸祭あり（金神社単独か。伊奈波神社については不明）
昭和 5 ～ 10 年	中絶	
昭和 11 年	1936	伊奈波神社新築と躍進日本大博覧会開催を契機に再開。3 日午前に神輿が伊奈波神社から赤口神社へ。祭典後に伊奈波神社へ還御（金神社は祭典に加わっていない）
昭和 12 年	1937	伊奈波神社については昭和 11 年に同じ。金神社は別に神幸祭をおこなっている
昭和 13 年	1938	4 日に斎行
昭和 14 年	1939	4 日午前に神輿が伊奈波神社から赤口神社へ渡御したのち還御。金神社は別に神幸祭を斎行
昭和 15 年	1940	伊奈波神社については昭和 14 年に同じ
昭和 16 年	1941	不明。金神社は 4 日に神幸祭を斎行している
昭和 17 年以後	中止。昭和 19 年には金神社は 4 日に神幸祭を斎行している	

新聞記事、伊奈波神社所蔵資料から作成

昭和 54	1979	4 台	金華・京町・明徳地区		神賑会
昭和 55	1980	4 台	金華・京町・明徳地区		神賑会
昭和 56	1981		雨天で宵宮など中止		
昭和 57	1982	4 台	金華地区・京町地区・明徳地区氏子中		
昭和 58	1983	4 台	京町地区	明徳地区氏子	神賑会
昭和 59	1984	3 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 60	1985	4 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 61	1986	4 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 62	1987	4 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 63	1988	4 台	金華地区	明徳	神賑会 ボーイスカウト
平成 1	1989	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト
平成 2	1990	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト第 16 団
平成 3	1991	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト
平成 4	1992	4 台	京町地区	明徳 人形修復、26 年ぶりカラクリ奉納	ボーイスカウト
平成 5	1993	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト
平成 6	1994	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト岐阜第 16 団
平成 7	1995	4 台	金華地区	明徳奉山会	ボーイスカウト岐阜第 16 団
平成 8	1996	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト岐阜第 16 団
平成 9	1997		雨天で宵宮など中止		
平成 10	1998	4 台	金華地区	明徳奉山会	ボーイスカウト岐阜第 16 団

新聞記事、『金華史誌』P155、伊奈波神社社務日誌などから作成



表 2-5 戦後の山車の奉曳（平成 10 年まで）（ ）の町名は推定

年代	西暦	総数	安宅車	若戎車	() の町名は推定	清影車	踊 車
昭和 25	1950				湊町		小熊町
昭和 28	1953				湊・元浜・玉井 3 町（3 町所有）		
昭和 30	1955						小熊町〈子ども踊り〉
昭和 31	1956						小熊町
昭和 32	1957	3 台		(大門町)	玉井町		小熊町
昭和 33	1958		(笹土居町)				神田町 1・2 丁目
昭和 34	1959				湊町		(出車しているかは不明)
昭和 35	1960	2 台	故障	金屋町 ※昨年の台風で破損、飾のみ	※昨年の台風で破損		小熊町 1 丁目〈唐獅子牡丹造り物〉
昭和 36	1961	1 台					小熊町 2 丁目
昭和 37	1962		本町 5 丁目 奉曳後、伊奈波神社に奉納				
昭和 38	1963		(出車しているかは不明)				
昭和 39	1964	3 台	矢島町 2 丁目	(大門町)			小熊町 1 丁目
昭和 40	1965	2 台	金華				小熊町 2 丁目
昭和 41	1966	3 台	安宅車保存会	金屋町 1・2 丁目 このうち伊奈波神社に奉納か			小熊町 1・2 丁目
昭和 42	1967	4 台	本町 5 丁目	伊奈波神社所有 今沢町広報会 奉芸	湊・元浜・玉井 3 町合同 このうち伊奈波神社に奉納か		小熊町
昭和 43	1968	4 台	金華	(明德)	(京町)		(本郷)
昭和 44	1969	4 台					
昭和 45	1970	4 台	金華	明德	京町		伊奈波神賑会
昭和 46	1971	4 台	京町地区	明德地区氏子中	金華地区		神賑会〈福艇車〉
昭和 47	1972	4 台	京町地区	明德地区氏子中	金華地区		神賑会〈福艇車〉
昭和 49	1974	4 台					
昭和 50	1975	4 台		金華地区・京町地区・明德地区氏子中			神賑会
昭和 51	1976	4 台	金華地区	明德地区	京町地区		神賑会〈福艇車〉
昭和 52	1977	4 台		金華地区・京町地区・明德地区氏子中			神賑会
昭和 53	1978	4 台		金華・京町・明德地区			神賑会